Presented by Stardust Books

創星

Vol. 7

Take Free

創星⑦

目次

目　次

3　短歌十首　春の夜　鳩山豆子

4　美しきレディバタフライの生涯　馬場貴生

7　クラシック教養のお時間　第4回　天沼太郎

10　イヌとペンギン　いちろまみ

13　サブカル対談　鳩山豆子×一路真実

19　末期の水と夏の庭　しなおかななし

33　サプリ　マチコ・オー・ソドックス

37　クラシック教養のお時間　第5回　天沼太郎

40　猫婆と犬畜生　詠人不知

42　ギミー・ダイアローグ　一路真実

57　Philosophy of Stardustbooks

58　編集後記

表紙担当‥ To's job

＊短歌　十首　春の夜

鳩山豆子

夕暮れにコンビニ前ですれ違うおばけに怖がられててさみしい

はい嘘です、ほどけた指や喉ほどに遠いね待ち遠しかった夕日

目を閉じて　みて　給食の牛乳が君のまぶたに溜まっているよ

いいよいいよ傷つけてみて白黒のこぐまがみんな整列をして

鉄棒に靴下みたいに貼り付いてあなたのことがみんなすきだよ

今晩のごはんのことを思いつつ自転車急なカーブを描く

無いものと知らないものは同じかなひとりっきりの線路に月夜

証明はいらない知らない番号を押せばあなたに繋がる不思議

一位だけ意味があるからいつだって私の順位を私は知らない

気づかずに歩いていった月あかりここにあるけど触れないから

美しきレディバタフライの生涯

馬場貴生

怪人がいました。

彼女の名前はレディバタフライ。蝶の能力をもった改造人間。

背中から大きな羽根が生えていたので、彼女はいつも背中の開いたドレスを着ています。

彼女はその昔、デス党と言う悪の組織によって今の姿になりました。

デス党はその後現れたヒーローによって滅ぼされました。彼女はその時、デス党の基地の中で冬眠状態で発見されました。

彼女は人間の頃の記憶を憶えてはいませんでした。かといって、悪い心を植え付けられたわけでもありませんでした。

怪人と言う新たな存在を怖がった人間たちでしたが、彼女もまたデス党による被害者で、何も悪い事をしていないのです。彼女の人権は保障され、レディは人間社会で生きられるようになりました。

生活をするには働かねばなりません。しかし、怪人が仕事に就くのはとても難しい事でした。人間が怪人を怖がったからです。仕事に就けない怪人たちは、福祉作業所で働きました。そこで家具を作ったりしていたのです。

ある日、レディは人間の男性に声をかけられました。

「あなたの羽根は、すごくきれいですね」

レディはびっくりしてしまいました。こういう風に言われるのは初めてだったからです。レディは、怪人である自分の身体をずっと醜いと思っていました。自分は人間として生まれた筈なのに、その頃の記憶も持たず、今は怪人として生きている。それがいつも嫌でした。

レディの羽根を褒めてくれた男は北条と言う名前で、自分のお店で踊ってくれるダンサーを探していました。しかし、レディはダンスなんてしたことがありません。

「大丈夫ですよ。あなたの美しい羽根があれば。それが自由に舞う姿を見れば、人々は見とれてしまうでしょう。あなたの羽根にはそれだけの価値がある。どうか、僕のお願いを聞いてもらいたい」

北条の言葉に勇気づけられたレディは、北条の店で働く決意を決めました。

作業所の他の怪人は、レディを温かく送り出しました。しかし、鉄仮面の顔を持つアイアン男爵は最後まで喜びませんでした。

「どうせ見世物にされて、飽きられたら捨てられるのがオチだ。君はいいように使われているだけさ。引き返すなら今のうちだよ。なぜ、ここを出て行く必要がある？　ここにいれば傷つくこともないのに」

確かにその通りです。怪人が外に出るという事は、それがただの散歩だとしても、自分ではどうしようもない非難を浴びる可能性があるのです。

しかし、レディは思うのです。

そういう事を恐れていては、自分はずっと人間から隠れて生きて行かねばならない。

自分の居場所を得るためには、自分から動きださなければなりません。

北条のお店の名前は「スワロウテイル」と言いました。アゲハ蝶の意味です。レディは何か運命のようなものを感じました。

お店で働く人たちは、レディにびっくりしました。そしてレディを嫌いました。

「怪人と一緒に働くなんて、考えられない」と言ってやめてしまう人もいました。

それもそうです。デス党が活動していた期間は十年以上にも及びました。その間、デス党に家族を殺された人と言うのも珍しくはありません。

レディが善人であるかどうかに関係なく、レディが怪人と言うだけで嫌う人は大勢いたのです。

しかし、レディはめげませんでした。

北条の言葉を信じたのです。自分の姿で人々を魅了する夢を描いたのです。

レディには、自分ではどうしようもない事を悩まずに、自分のできる事をやり続ける強い心がありました。

そうしてレディは、来る日も来る日もダンスのレッスンに励んだのです。

そして、数か月が過ぎたのち。レディの初ステージの日が来ました。

店の人間は、来る日も来る日も練習にかけくれたレディを知っていたので、応援してくれました。

リハーサルを見たみんなは、その美しさに言葉を失くし、北条もレディを褒めてくれました。

「思った以上だ。君なら、きっと皆を虜にするだろう」

レディは喜びました。北条に喜んでもらえるのが一番うれしく思いました。

そして本番。店内が真っ暗になり、ステージにパッと明りが付きました。

真ん中にレディが立っています。

すると、客席からブーイングが飛びました。「怪人だー！」「ひっこめー」「怪人がでしゃばるなー」ひどい暴言に、レディは耐えようと思いました。音楽がなったら、自分が躍ったらみんなが褒めてくれるに違いない。そう信じて、じっとその場で耐えました。

音楽が流れだし、レディは手を伸ばし、滑らかに踊り始めました。

それはまるで、優しい風に吹かれる羽衣のように。

それはまるで、清い小川を流れる水草のように。

そして、ふわっと飛ぶと、羽根が広がり、ライトの光を浴びた鱗粉がキラキラと光り、まるでこの世のものとは思えない美しさ。

踊るレディは夢中でした。北条に褒めてもらうために。みんなに褒めてもらうために。踊るレディには音楽以外、何も聞こえませんでした。それほど必死でしたし、何より人前で踊るのが楽しかったのです。

レディが躍り終えました。

ふと気づくと、割れんばかりの大喝采がレディの耳に入りました。

ダンスが始まる前までは暴言を吐いていた客も、今は喜んで拍手をしていました。

客の一人はこう言います。

「すばらしいものを見た。この世のものとは思えない美しさだ」

「怪人が躍る店」として、「スワロウテイル」には多くの客が詰めかけました。レディは今や時の人。時にはテレビの取材まで来るのです。

レディは、ある日、北条にお願いをしました。作業所の怪人を呼びたい。仲間たちに今の自分を見せてあげたい。北条は、そのお願いを快く受けました。

怪人たちが来る日は、北条の計らいで貸切になりました。怪人と人間のトラブルを回避するためです。

そして店内が暗くなり、いつものようにレディのステージが幕を開けました。それはそれは素晴らしいダンスで、客席で見ていたアイアン男爵は人知れず涙をこぼしました。

ダンスを終えた後、レディは仲間たちに言いました。

「私は今、とても幸せです。

自分が怪人となってしまったと知った時は、悲しくて死にたいと思ったけれど、今、こうして皆に愛される存在でいられることは、私が怪人だから。

ああ、自分が怪人でいる事を許せる日がくるなんて思っても見なかった。

みんなも、怪人だからと言って人生を諦めないでほしい。もしかしたら、私がものすごくラッキーだっただけかもしれないけど、私が作った道に、みんなも続いてほしい。

私は、みんなに幸せになってもらいたい」

レディの言葉に、皆が涙しました。

彼らの人生は、いくらきれい事を述べたところで、想像以上の苦労が待っているのです。しかし、彼らの心にレディに言葉は沁み渡りました。レディは彼らに明日を生きる勇気を与えたのです。

美しいレディバタフライ。

彼女には伝えたい想いが、もう一つありました。それは、怪人である自分にチャンスをくれ、そして人生に大きな幸せを与えてくれ

た北条へ、その想いを伝える事です。

ある日。「スワロウテイル」が閉店した後、レディは北条にその想いを伝えました。

「北条さん。怪人の私を、こんな風に育ててくれて本当に感謝しています。

こんな幸せな日々がくるなんて、想像もできなかった。自分の人生を肯定できるのも、みんな北条さんのおかげです」

「そんな、大げさだよ。

君は、元々人を惹きつける素質があったんだよ」

「そんな事……。

北条さん。私、北条さんへの感謝の気持ちでいっぱいです。

あの、それで……」

しばしの沈黙が流れました。レディは、一番言いたい事が言えずにいました。

「レディ……」

北条が何かを言いかけたその時、それを遮るように、レディが口を開きました。

「私、ずっと北条さんと一緒にいたいです。お願いします。お付き合いしてください」

北条は、優しくレディの頬に触れました。

「レディ……、こんな事を言わせてしまってすまない。でも、僕は君と付き合う事は出来ない。君は素敵な女性だが、僕は人間と怪人の壁を打ち崩す勇気はない。

君に魅せられたのは事実だ。だから、こうなる事を一番に恐れた。こうなる前に手を打つべきだった……。

僕を嫌ってくれていい。どうしようもない偽善者と罵り、許しがたい臆病者と蔑んでもらって構わない。

……すまない」

レディは俯いて、しばらく黙っていました。

しかし、ふっと顔を上げ笑顔を見せました。

「北条さん。ちゃんと返事をくれてありがとうございます。大丈夫です。私。

北条さんのおかげで色んなことができるのわかっちゃったもの。

また恋もできます。今の私なら、自由な恋を謳歌できます。また人を好きになります。

だから北条さん。私をずっと店に於いてください。ここは、私の大切な場所……。

私、もっと踊りたい」

レディはその場で舞って見せました。涙が見えないように踊りました。

北条は、「わかったよ」と言って、それを見ていました。

不幸は突然に訪れました。

いつものように、レディは美しく踊りました。客は満員で、皆がレディに見とれていました。

突然、レディが倒れました。まるで、操り人形の糸が切れたように。何の前触れもなく、その場に倒れたのです。

キラキラと光る鱗粉だけが宙を舞い、レディは動かなくなりました。

レディは、死んでしまいました。

怪人は戦うために作られた改造人間です。その身体はまだまだ謎だらけです。しかし、その身体は不自然で、いつ機能不全を起こしても不思議ではないと言う意見は、どの研究者も一致しています。

怪人は、いつ死ぬともわからないという事です。

レディの死は、世界中を悲しみに包みました。驚いた事にレディの葬儀を執り行おうと言い出したのは、人間だったのです。そしてその声に、世界中の人たちが賛同しました。しかし、それでも今まで怪人に対して、人間の方から何かをしてやろうと言う行動はなかったのです。

レディは、怪人と人間の壁を崩したのです。

アイアン男爵は、作業所をでて工事現場で働いていました。アイアン男爵の強靭な肉体は、工事現場で大いに役に立ちました。

今や、怪人が働いている姿は多くの場所で見られます。

美しきレディバタフライが、皆の心に生き続けている証拠です。

レディは幸せだったでしょうか。

作者は、幸せだったと思います。

おわり

クラシック教養のお時間

天沼 太郎

第4回 伝統の底力、ドレスデン国立歌劇場

本物は圧倒的だった。小賢しいところは微塵もなく、悠然と流れる音楽は、しかし、変化にも富んでいて、私の耳を引きつけて放さなかった。3時間超のその演奏を、私はこのまま永遠に聴き続けたいとさえ思った。

演目 W. A. モーツァルト作曲 「フィガロの結婚」
演奏 ドレスデン国立歌劇場管弦楽団および同合唱団
会場 ドレスデン国立歌劇場*1
日時 2006 年 3 月

私が初めて実演を聴いたオペラは、R. シュトラウス*2 作曲の「サロメ」*3 だった。指揮者、歌手、オーケストラが一体になった演奏は素晴く、最初に聴くオペラとして幸運だったと思う。

オペラ終盤に奏される「7 つのヴェールの踊り*4」はもちろん衝撃的だったけど、それより全体に狂気をはらんだ今にもすべてが崩壊してしまいそうな、危険で強烈な公演だった*5。しかし、これはオペラなのだろうか？オペラというもの、それをどう定義するかは難しいのかもしれないけれど、このサロメに関していえば、「興業」*6 なのではないかとどうしても考えてしまう。

福岡市の箱崎宮では、毎年 9 月に放生会*7 というものがある。その時、毎年のように「蛇喰い女」の見せ物がある。残念ながらその見せ物に、はらはらするような危険な匂いはないけれど、しかし、少なくともその入り口に初めて並んだときはずいぶんドキドキしたものである。ふと思う。もし、あの見世物小屋で、サロメを見られたなら？むちゃくちゃな発想かもしれないけど、私は間違いなく大満足する。

けれど、オペラが「蛇喰い女」でよいのか？オペラはもっと高級なものでなくて良いのか？しかし、そんな「オペラは高尚」みたいな思いこみは、却ってオペラの理解を妨げてしまわないか？じゃあ、本当のオペラとは何だろう？

ドイツに二回目の旅行をして、向こうのオペラ公演をいくつか見た。ベルリン国立歌劇場*8 では「蝶々夫人」*9 を見た。指揮者のせいだろうか？オーケストラの演奏が雑で、あらすじの確認をしにいったようなものだった。次の公演がドレスデン国立歌劇場の公演。これがすばらしかった。

クレジットカードを持ってなかったので、日本からチケットの手配ができなかった*10。そのため、ドレスデンに着いたその足で、劇場窓口に向かった。ところが座席はみんな売り切れていた。唯一購入できるのはなんと立ち見席。立ち見席のチケットなんか売るなよ！

そうはいっても、せっかく来たドレスデン。ここで諦めてしまっては、もう二度と聴くチャンスはないかもしれない。立ち見するのは CD にして3時間超、休憩時間を考えると4時間のオペラ*11。迷ったけど、チケットも安いことだし、疲れたら途中で切り上げようとチケットを購入する。3ユーロ(450円)ぐらいだった。

オペラ劇場は馬蹄形の伝統的なホール。私の席は5階で、ステージは遙か遠くに見える。目の前の席は空席が目立った。もしかしたら、座れるのではないかと思ったら、その通りだった*12。うまく座れたけど、その安い席からだと、体を思い切り乗り出さないと舞台が見えない！唯一真正面に見えるセリフの掲示板*13 に映されるのはドイツ語(このオペラはイタリア語で歌われる)。無理してステージを見ていると、5分もすると体が痛くなってきた。全くとんだ公演に出かけてしまった！

ところが、いつの間にか私は、音楽に完全に入り込んでしまった。音楽が生きているのだ！

序曲*14 はざくざくした硬めの演奏*15 だった。しかし、音に勢いがある。もとから好きな曲だったけど、どういうことだろう、何かしらウキウキしてくる。序曲に続いて始まる歌手たちの歌、そしてオーケストラによる伴奏、どれも生き生きしている。曲を聴いてるだけなのに心が晴れ晴れしてくる。

もちろん、オペラなのでストーリーがある。明るくなったり暗くなったり。喜んだかと思えば悲しみがあり、怒りは悪だくみにつながるという実に人間くさいドラマである。現実世界を見るようで、そんなオペラを見て（聞いて？）、心が浮き立つようには思えない。

もしかしたら、モーツァルトの音楽が凄いのかもしれない。モーツァルトが本領を発揮するのはオペラだと聞いたことがある*16。確かにそうだろう、モーツァルトの手にかかると、どんな怒りも悲しみも、一瞬の衝撃の後、軽やかに通り過ぎていく。だから音楽は淀みなく快適に流れる。それを演奏しきるオーケストラの力量も見事。

しかしそれだけではない。確信ではないだろうか？このオーケストラはそれこそ 200 年以上前からフィガロの結婚を演奏している*17。このオペラを完全に手中に収めているから、自信を持って演奏できるのではないか？200 年も演奏を続けていれば、団員の世代交代はあるだろう。しかし、先代から次の代へフィガロの演奏法は伝えられてきた。そして、このドレスデン近郊に住む人々に常に高水準の演奏をしてきた強い伝統があるのではないか*18。

公演は休憩を入れて4時間以上となった*19。しかし、あまりに見事な演奏にため息をつくことはあっても、ほんの一瞬たりとも退屈することはなかった。演奏が私を惹きつけて放さなかった。予備知識はいらない*20。舞台もいらない、セリフもいらないし、ストーリーすらいらない。この暗い席に座って、流れてくる音楽にずっと身を浸しておきたい。曲は時にどす黒い悪意にもなる。恐怖もある。しかし、すべては箱庭の中のこと。どんな嵐も、最後、愁いを帯びた伯爵夫人の歌うアリアですべて浄化される。いや、こんな解説もいらない。流れる曲に身を任せ、ただひたすら素晴らしい音楽に身を浸したい。

あれから10年近くたった。今でもドレスデン国立歌劇場の夢のような公演を思い出す。最近、映画「ショーシャンクの空」*21 を見たとき、あのフィガロの結婚の中でもっとも美しいアリアの一つ、伯爵夫人のアリアが流れたとき、自分があのドレスデンの真っ暗なオペラハウスに座っているような錯覚を起こした。

当然ながら、たった一回素晴らしい体験をしたからといって、オペラを定義づけられるとは思わない。しかし、私はオペラの一つの究極を見た。簡単に言葉にできないけれど、「これがオペラなんだ」としかいいようのない強烈な体験である。同じような体験をしたいと思い、その後もいろいろなオペラ公演に出かけた。しかし、このときほど「これぞオペラ！」といいたくなるような心躍る公演にはまだ出会っていない。

一方で、それとは別の演奏があることも知っている。次回、そういう公演について書こうと思う。

＊1：ドイツのバイエルン州州都ドレスデンにあるオペラハウス。ゴットフリート・ゼンパーにより設計されたことから、彼の地ではゼンパーオーパー(オペラ)と呼ばれるらしい。
＊2：R. シュトラウス：リヒャルト・シュトラウス(1864-1949)。ドイツ生まれの作曲家。19 世紀末に活躍した。「ツァラトゥストラはかく語りき」(の冒頭)が有名。オーケストラの演奏能力を最大限に発揮する曲を何曲も書いた。

＊3サロメ:旧約聖書に出てくるエピソードをもとに、「幸福な王子」で有名なオスカー・ワイルドが脚本を書き、R. シュトラウスが曲をつけたオペラ。脚本は文庫で読める。
＊4:義父である王の望みに応え、王女サロメが踊る踊り。曲が進むに従って歌手が服を脱いでいくというとんでもない箇所。初演時、歌手は「こんな歌(踊り)、自分にはできない!」と断ったそうな。
＊5:オペラの最後で、とうとう秩序が崩壊する。圧巻！
＊6:見世物。音楽や演劇のように、(内実はともかく)それを見ることで人々の芸術性を高めたり、感性をみがくようなものではない。
＊7:放生会とは、捕獲した魚や鳥獣を野に放し、殺生を戒める宗教儀式(Wikipedia より)。福岡では毎年 9 月に行われる。箱崎地区ではもっとも大きな行事。
＊8:1742 年に初演を行ったドイツ有数のオペラハウス。第2次大戦前、まだクロル・オペラと呼ばれていた頃、そこの音楽監督だったオットー・クレンペラーは前衛的な作品を次々と上演した。しかし、そのおかげで客足は遠のいてしまった。あまりに尖ったものが受け入れられないのは、どこの世界でも同じである。
＊9:プッチーニ作曲の名作オペラ。明治初期ごろの話。没落士族の娘蝶々夫人がアメリカ海軍の士官ピンカートンと結婚する。蝶々夫人は永遠の伴侶を見つけたつもりであったが、ピンカートンは軽いお遊びの結婚だった・・・。
＊10:最近は、大きなオペラハウスはたいてい、カードさえあればネットでチケットが予約できる。最近は、ドイツ語英語の他に、日本語の使えるサイトが増えてきた。
＊11:オペラは概して長い。オーケストラの演奏会だと、だいたい 2 時間ちょっとで終わるけど、3 時間 4 時間はざら。ワーグナー作曲の「ニーベルングの指輪」は、休憩日を除くいて4日間(4公演)で完結する。海外旅行でオペラを見に行った場合、夕食を食べる店が見つからなくて苦労することがある(あった)。
＊12:演奏開始と同時に、周囲にいた立ち見客がささっと空席に移動した。そういう仕来りらしい。
＊13:10 年ぐらい前から、オペラの対訳を電光掲示板で表示するようになった。それ以前は、観客に対訳を配っていた。経費と手間を減らすためだろうか。
＊14:オペラ冒頭に流される曲。前奏曲が置かれることもある。詳しいことは知らないけれど、序曲は終わったら拍手をし、前奏曲は(オペラと一体化しているので)拍手をしてはならない。後年の作曲家には、序曲も前奏曲も置かないプッチーニのような人もいる。
＊15:オトマール・スウィートナー指揮、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団(Berlin Classic)の CD がその時の演奏に近い。ただし、この CD では、歌詞がすべてドイツ語。
＊16:後年、このドレスデン国立歌劇場によるベートーヴェンの運命交響曲の演奏を聴いた。指揮者は才能あるチョン・ミュンフンだった。ところが、やたらとイカツイ演奏で、まるで説教されてるみたいだった。それを分かってだろうか？交響曲演奏後、指揮者が「このオーケストラが普段演奏しているオペラ曲を(アンコールとして)演奏します」と述べ、ウェーバー作曲「魔弾の射手」序曲を演奏してくれた。素晴らしい演奏だった。
＊17:モーツァルトが 1786 年に作曲したオペラ。映画「アマデウス」にも登場する。伯爵の家臣フィガロが、持ち前の才気で伯爵をギャフンと言わせる。
＊18: ドレスデン国立歌劇場の演奏は、楽器の進化を除いて、この200年ほとんど変わってないのかもしれない。来た観客を夢見心地にされるが、演奏として完成し、もしかしたら進化の袋小路に入っているのかもしれない。伝統というものはみんなその傾向がある。それがよいか悪いか各人の判断することだと思う。
＊19:休憩は30分。休憩時間、着飾った紳士淑女がホールで歓談していた(もちろん、私みたいな貧乏学生もいっぱいいた)。オペラがステータスシンボルになるのはどこの国も一緒。
＊20:とはいえ、予備知識は必要。オペラ公演なら、大まかなあらすじさえ押さえていけばよい。そうしないと、字幕読みに追われて音楽を楽しめない。
＊21:無実の罪でとらえられた主人公が、刑務所で送る日々を描いた名作。監督のコメント入りのスペシャル・エディションがまた面白い。

イヌとペンギン

連載第7回

いちろ　まみ

あらすじ
ペンギンのぺんちゃんは、南極大学から日本のとある大学に留学中。ぺんちゃんと相棒のイヌが繰りなす不思議なお話。

第11話　サークルに勧誘されるの巻

ぺんちゃんとイヌが大学に行くと、キャンパスはカラフルな看板が飾られ、いつもより学生が多く賑わっています。
「今日は、学園祭わふ」
と言いながら、イヌは屋台でイカ焼きを買ってきて、ぺんちゃんに一本渡しました。
「お祭りぺひか～」
すると、キツネがイヌに近付いてきました。
「よう、イヌじゃないか」
同じ授業を取っている友人のようです。
「良かったら、遊びに来いよ」
そう言って、一枚のチラシを渡してきました。
「何ぺひ？」
ぺんちゃんはイカを口にくわえたまま、イヌの前足を覗きこみました。
「催眠サークル？」
「絶対やめた方がいいぺひ！」
ぺんちゃんはひれで必死に抵抗していました。
「ぺんちゃん、一度行ってみたいわふ」
「だめぺひ！　危ないぺひ！」
イヌは楽しそうに舌を出して、ぺんちゃんのひれをしっかり前足で握ると、ぐいぐい引っ張ります。
「一度、体験したいわふ」
イヌはチラシに書かれていた、「催眠にかかると、全部が好きな食べ物に見えてくる！」という言葉にひかれ、頭の中はいろいろな食べ物がめぐっていました。べろんと出た舌は早く食べたいと言っているようでした。
「ぺんちゃんも、好きな魚がいっぱい食べられるわふ」
その言葉が決め手になったかどうかは分かりませんが、ぺんちゃんはついに根負けして、イヌに引きずられるようにして催眠サークルの教室に入りました。
すると、たくさんのキツネが出迎えました。
「催眠体験コーナーでよろしいですか」
明るい教室内に、一人掛けのソファがいくつも用意されています。催眠が始まっているコーナーは仕切りが置かれ、中の様子が見えません。
「大丈夫ぺひか……」

ぺんちゃんは不安でたまりませんでした。一緒に入ったイヌはもうソファの上に乗って、今か今かとしっぽを振って待っています。仕切りを間に入れようとしているキツネに、ぺんちゃんは慌てて

「同じコーナーに二つソファを入れてほしいぺひ」

と頼みました。

「いいですよ」

とキツネは目を細めて、イヌが座っているソファの隣にぺんちゃんのソファを入れてくれました。

「では、リラックスしてください」

キツネがひもをゆらゆらと揺らします。ひもの先に付いているのは大きないなりでした。揺らす度にいなりがぺろんとめくれながら回ります。

「不思議な動きぺひ……」

ぺんちゃんはちらっとイヌの方を見ました。イヌはいなりを見つめて、だらだらとよだれを垂らしながら、必死で食べたいのをこらえています。

「何か違うぺひ……」

そう思っていると、だんだんといなりの裏側に吸い込まれていくようで、後ろで揺らしているキツネの目もひげも何もかもがぼやけて見えなくなっていきました。

「ぺんちゃん、こっちわふ！」

イヌがそう叫ぶのを聞いて、ぺんちゃんはハッとしました。イヌが這いつくばって何かを探しています。

「ぺんちゃんもこっちで探すわふ！」

真っ白い世界には、イヌとぺんちゃんしかいませんでした。

「ここはどこぺい？」

辺りを見回していると、イヌが真剣に言いました。

「ここに落ちている記号を拾うわふ」

イヌが、カタカナのウのような記号を持ち上げました。すると、黒くて硬かったウがぷるんとまるで生き物のように動きました。

「ぺんちゃん、その足元の記号を取るわふ」

言われた通り、足ひれの近くにあった由という記号を持ち上げると、同じようにぷるんと震え、イヌが持ってきたウと、ぴたっとくっつきました。

「こっちに置くわふ」

先に置いてあった「宇」の隣に置くと、文字は突然ひっつき大きくなり、ふわふわと浮かびました。すると突然、真っ白い空間が、真っ黒な空間に変わりました。黒い中にきらきらと星が無数に散らばっています。宇宙という文字がゆらゆら揺れていました。

「すごいぺひ……」

すると、イヌがまた言いました。

「ぺんちゃん！　休んでいる暇はないわふ！　全部拾わないと出られないわふ！」

「ぺん！」

ぺんちゃんはまた、白い床に散らばる記号に目を落とし

した。
「イヌ！　そっちを拾うぺん！」
　ぺんちゃんは「立」という文字を拾い上げていました。イヌが、
「これわふ？」
　と言いながら持ち上げたものは、「目」でした。
「こら、イヌ！　間違ってるぺひ」
　すると、イヌは都合の悪いときにいつも使う台詞を言いました。
「イヌは日本語よくわからんわふ」
「イヌは日本の犬なのに、また勝手なこと言ってるぺひ」
　ぺんちゃんは、イヌの足元に転がっていた「日」を取り上げました。
「これとこれぺひ」
　すると、今度は「音楽」という言葉が浮かび上がりました。記号を組み合わせると文字ができます。文字がぴったりくっつくと言葉ができ、言葉は意味を持って空間のすべてを支配していきます。今まで作った言葉は次々と浮かびあがりました。言葉は歌詞になり、メロディーに乗って世界をつくっていきました。まるで体が遠くへ運ばれていくように、ぺんちゃんは尾びれをゆらゆらと揺らしました。
「日本語ってすばらしいぺひ！」
　ぺんちゃんの動きに合わせるように、イヌも足でリズムを刻みました。二匹はいつまでも音楽に合わせて踊り続けていました。

　ハッと目を開けると、目の前にいなりを持ったキツネがいました。
「どうでしたか？　良い眠りだったでしょう」
「すごく気持ちよかったぺひ。いっぱい寝てしまったぺい」
　ぺんちゃんは、ひれで頭をぽりぽりとかいて恥ずかしそうにしました。
「いえいえ、これでも十五分くらいしか眠っていませんよ」
「ここは、睡眠サークルだったぺひ！」
　キツネは満足そうに目を細めると、こんこんとうなずきました。突然、ぺんちゃんはがつがつという音を聞いて、横で寝ていたイヌの方を向きました。すると、イヌは一生懸命何かを食べています。
「イヌ、何食べてるぺひ？」
　ぺんちゃんが呼びかけると、イヌは目を真っ赤にし、大きな牙をむき出したまま言いました。
「ぺんちゃんも、食べるわふ！　とてもおいしい肉わふ！」
　しかし、イヌが前足でしっかり握っているのは、果汁が滴るレモンでした。
「イヌはすっぱいものも食べられるようになったぺひ」
　そんなのんびりしたことを言っているぺんちゃん。次は、日本語のサークルを探してみようと思ったのでした。

（つづく）

鳩山×一路 サブカル対談 第7回

第7回目のテーマは、映画『みなさん、さようなら』です。

鳩山：どうでしたか？

一路：私の感想からでいいの？　いきなり長く語ってしまうかもしれないけど（笑）

鳩山：いいよ（笑）というか、一路さんが好きそうな映画だと思ったんだけど。

一路：本当？　うーん、宇野常寛の『ゼロ年代の想像力』っていう文化批評の本を読んだんだけど、まさに宇野さんが書いてたようなことをそのまま映画にしたような内容だと思ったの。

鳩山：うん。

一路：九十年代のオタク・ひきこもりっていう時代をそのまま表している映画だなと。ネタばれになるけど、母親が死んだことにより団地から抜け出られるという展開が、団地というある種の母胎から外の世界に出るという構造と一致するというか。

鳩山：あの団地の階段が、産道の象徴というか比喩だったね。

一路：そう。例えば、九十年代に爆発的にヒットした『エヴァンゲリオン』も、父と息子の関係として語られることが多いけど、主人公が乗り込むエヴァが母胎の象徴だし、ネルフが目指す人類補完計画もまた母性の暴力性がある。この映画も、濱田岳が団地

を出ないことを母親が暗に認めていたからこそ、母親が亡くなったことにより団地から抜け出られるという構図なんだなと思ったの。ただ、私が一番感じたことは、母親が亡くなったからといって本当の意味で社会に出られたのか、ということ。映画の設定としてはゼロ年代に入ってすぐ、三十歳になったところで終わるんだよね。濱田岳がゼロ年代をどう生きるのかは映画の中で語られてはいないんだけれども、私としては、九十年代はひきこもっていられたかもしれないけど、ゼロ年代はそうはいかない、と言いたい。団地の中よりも、社会に出てからが大変だって。宇野さんの本だと、九十年代のオタク・ひきこもり文化からゼロ年代は「バトルロワイアル的状況」「サヴァイヴ感」に変化したと書いてる。つまり、九十年代に「何も選択せずに引きこもる」という状態だったのが、「何も選択しなければ殺されるから、選択して生き残る」というふうに変わってきた。例えば、『バトル・ロワイアル』、『リアル鬼ごっこ』、『LIAR GAME』『DEATH NOTE』とかね。主人公がそこで展開されるゲームの特定の価値観をあえて受け入れて、その社会を生きることを選択するという状況になってきた。自分が力をつけて戦う「万人の万人に対する闘争」状態というか。だから、私としては団地から外へ出ても、社会の方がもっと辛いぞってことが言いたかったの。あともう一つ不満に思ったことは、薗田君のこと。

鳩山：あー、薗田君は悲しかった。「自分がスプーンを落としたから、ロンドンの地震が起きた」とか言ってね。芝居が上手だからなのかなぁ。一週間くらい薗田ショックを引きずったよ。

一路：この人、もうそっちの世界にいっちゃったなと思うよね。

鳩山：あのシーンまでの運び方がうまいのかな。薗田君が優しげな雰囲気でね。精神状態がまともになったのか、なってないのか、そこまでは微妙な感じで描かれてるし。婚約指輪買ってきたところはイケてる格好してたから、この人回復したのかなって思ったけど。

一路：最初ひきこもりで、よくなってきたかなと思ったけど、微妙な状態になって、最後だめになったよね。でも、大検を取ったり食品衛生の資格取ったりして、団地の外とコミットしようと頑張っていたのは薗田君の方だったのに、最後は精神病院に入るって形でしか団地を出られないなんて悲しすぎると思った。

鳩山：薗田君は外には出られるけど人とは関われないんだよね。主人公の方は、団地から出られないっていう条件があるから、空間は限定されるけどコミュニケーションはとれる。

一路：ああそうか。そういう対比があったのか。

鳩山：だから、最終的には薗田君の方が厳しい結果になった。

一路：外に出て社会にコミットしようと頑張っていた薗田君がだめで、社会とコミットしていなかった主人公が外に出られるという展開だから、外に出たら辛い社会が待っているわけで、主人公は大変なんじゃないかと思ったの。しかも、もうゼロ年代も越えて二〇一三年になった今、ひきこもりから外に出るという構図のこの映画を作ったことに何の意味があったのだろうとまで考えてしまった。

鳩山：基本的なところから話した方がいいかなと思うんだけど、あの映画が新しいのは、自分の部屋でひきこもるんじゃなくて、

団地でひきこもるっていう設定なんだよね。一つには、そんな狭い空間でも社会は成り立つんだっていうこと。恋愛もできるし、就職もできる。でも、そこから外に出ないといけない。この枠が新しい。

一路：団地自体が、自分の拡張である社会で自分の中にひきこもっているのと同じ。で、やっぱりその外側に社会があるっていうことだよね。

鳩山：これが部屋でひきこもる話だったら、新しさはなかったよね。

一路：確かに。主人公は人とコミュニケーションは取れるから、コミュニケーション不全とかでは無いよね。

鳩山：団地と彼女と自分っていう感じが、エヴァンゲリオンっぽさというか、「君・僕・世界」みたいなセカイ系って感じがした。だからこそ、主人公は団地の人たちに執着していくんだよね。

一路：あれすごかったね。パトロールして。

鳩山：団地をいったん出てしまうと気にならないけど、団地にいるとものすごく気になってしまうって感じが、ちょっと分かるような気もしたな。人間関係の一過性というか。

全体的な関係性としては、本当に優しい世界観だったよね。あいつが団地にいるから集まりは集会所でとか。

一路：そうそう、普通はほっとくよね。

鳩山：そこが優しい世界なんだよね。事件があったこともみんなが分かっていて受け入れているというか。

三十歳になって外に出るから、ちょうど私たち世代の話だよね。小学生の時に酒鬼薔薇聖斗事件があったりとか。

一路：でも、実際の設定は十年昔なわけでしょ。ファッションとかね。

鳩山：私としては、一路さんが好きそうな映画だなぁと思って観てたよ。ただ、自分も全然嫌いじゃなかった。濱田岳の気持ちが分かったもん。

一路：うそー。私は逆に、全然共感できなかったんだよね。

鳩山：「頑張れ、頑張れ」と思ったよ。共感できたというか、むしろ羨ましかったな。濱田岳、結構友達いるし。

一路：確かに、友達に認められてる感じはすごかった。濱田岳っていうひきこもりを認めてる、周りの人たち。

鳩山：羨ましかった。

一路：私やっぱり、薗田君はあんなに頑張って外と繋がってたのになぁって思ってしまう。

鳩山：薗田君は濱田岳を通してしか外の世界とは繋がれなかったんだよ。だから、楽しそうに濱田岳と団地内をパトロールしてたんだよ。むしろ濱田岳の方がかわいい子と付き合ったりしてたから、どちらかといえば薗田君にとって濱田岳は憧れの対象だったんじゃないかな。

一路：そっか。

鳩山：確かに薗田君は団地の外に移動することはできて、いろいろ資格取ってたけど、人間関係としては、濱田岳しかいなかった。逆に濱田岳には、ケーキ屋、彼女、友達とか選択肢がいろいろあった。弱者は薗田君だったんだよ。

一路：そう思うと、生きる順位として一番重要なのはコミュニケーションなんだね。

鳩山：そう。

一路：だからその狭い世界にいたとしても、人とコミュニケーションがとれて関係性が築けているってことは、そこはもう完結した社会の中にいるってことなんだよね。宇野さんの本でも、現代は交わらない複数の

コミュニティが乱立して、それぞれの中で生きていける状態って書いてた。

鳩山：それ、宮台真司も言ってた気がする。何だっけ、島宇宙？

一路：宮台だとそのコミュニティの中で「終わりなき日常」を生きろと言っていたけど、宇野さんは、宮藤官九郎の『木更津キャッツアイ』みたいに、ぶっさんが死ぬという終わりを感じながら、ゆるやかにつながっている「終わりを見つめた日常」としてのコミュニティに重要性を見出しているみたい。最後、濱田岳も外に出て行くじゃん。

鳩山：ああ、そうだね。でも考えてみると、濱田岳は、外に出て行くべきだったのかな。私は、コミュニケーションって宿命的に閉じるものだと思う。常に開きっぱなしってことはないわけだから。関係が進めば進むほど、例えば誰かと結婚するとなったときに、絶対そこで完結するわけだし、ある種の小さい団地状態になる。職場とかも同じで、どんなに大きな組織に所属したって、現実的に関わり合いになる人は特定の何人かで、狭い中でいざこざを抱えながら関係性をキープすることになる。関係性が進めば進むほど、その関係って収束していくものなんじゃないかな。

一路：そうだね。

鳩山：だから、濱田岳も団地を出たとしても、結局は新しい団地を探すだけなんじゃないかなって思う。

一路：なるほどね。

鳩山：濱田岳が走っていくあの行き先は、次の団地だ。

一路：次の団地か（笑）次住んだアパートでもパトロールとかしちゃうのかな。町内会とかにちゃんと所属してね。そう考えるとおもしろいね。

鳩山：ただ、また次の団地を探すだけなのに、そうであっても出ないといけないっていう意識がある。本当は結果的に変わってないかもしれないのに、みんながすごく変化があるって思い込みすぎてる。団地に住んでた友達全員が次の何か違う世界があるって出て行ったけど、そう思ってるだけなんじゃないってね。まあ、中には俳優目指した人とかもいて。

一路：チョイ役でテレビに出たりしてたね。

鳩山：あれが何だか外の世界って感じがするよね。付き合ってた子も外に出て行くし。

一路：そうね。

鳩山：でも、どういう違いがあるんだろうって思う。バイト先の人と結婚しても、カラオケに行けるとかあるかもしれないけど、大した違いはなくて本質的にはどっちと付き合ってもあまり変わらない。

一路：うん。

鳩山：本当にあの団地って、出て行かなきゃいけないものだったのか？出て何が変わったのか？ってことが問題なのかもね。

一路：団地をどうしても出ないといけない理由は特になかったよね。逆に言うと、みんなが出て行ったからこそ団地や社会がすたれちゃって、薗田君がいた時はお店もできてたけど、自分だけじゃ何もできない状態になっちゃった。

鳩山：そうそう。外に出る理由としては、そこは一つあるよね。社会制度的な制約というか。お母さんの病院とか資格とか。

一路：その機能が団地内にあればやっぱり出なくてよかった。

鳩山：団地内で何でも済むっていう設定にして、そこが物語としては新しい。だけど、出なくて済む世界を自ら作り出したにも関わらず、外に出るという物語にしたから、なぜ出ないといけないかという理由がなく

なった。なのに、結論が団地の外に出られて良かったってだけで終わったから、ちょっと変になったのかも。

一路：成長物語みたいに位置づけられてるけど、私としては成長したとは思えなかったんだよね。何でだろう。主人公が「変わった」ってあまり思えなかったからかな。できなかったことができるようになったというのは確かに成長なんだけど。団地から出られなかったのが出られるようになって、でもそこに意味付けがなかったから、本人が本当に変わったとは思えなくて、素直に成長だとは思えなかった。

鳩山：そうね。もっと定番というか、部屋から出られない人がいて、やっぱり人と繋がらなければいけないってエピソードとか、人と向き合わなければいけないエピソードがあって、外に出られるってストーリーだったら、シンプルだったけど。

一路：家じゃなくて、団地にしたっていう設定は確かにおもしろかったけど、社会の機能が結構団地に詰まってたから、そこから出るっていう必然性が無くなったんだね。

本人の成長物語としては、体鍛えたりして、できないことができるようになったって要素もあったけど。指一本で腕立てしたり。そうやって、成長物語っぽい展開にしたことで、映画としてはまとまってた。ただ本質をよく考えると、どうなんだろうという映画だね。

鳩山：やっぱり、その閉塞感って何だろうってことだよね。本来、団地は社会だったから、はじめから社会に参加してたのに、勝手にそこにいられないと思い始めたからこそ出ないといけなくなった。問題意識があるから問題が生じるって話みたい。その閉塞感ってなんだろう。

一路：体鍛えて、格闘家として団地を出て行くとかいう展開だとすっきりしたかもね（笑）

鳩山：格闘家になるって話だと、すっきりするね！　でも、力を手に入れて解決する方法だと、力を手に入れられない人はどうするのかってことが残るから、そうじゃなくて精神的な成長じゃないと。

あの団地って、子供たちにとっては、初めから与えられているスタートラインなんだよね。平凡で、何もない舞台。でも、その子供の親たちにとっては、自分の人生でつかみ取った最新で素敵な環境の住居というか、人生のステージだったんだと思う。濱田岳が団地から出たって、次の団地に辿りつくだけだっていうのと一緒で、あの団地は誰かから見たら、やっと辿り着いた場所だったと思うんだよね。

人生って10代とか若い時期は、自分には無限の可能性や選択肢があるって期待感があって、親も子供にそういう幻想を植え付けたりする。でも、さっきも言ったように、その中で何かを選んだ後は、もう人生って一点に収束していくしかないし、言うほど選択肢もないしって気づくしかなかったりする。

でもそれを馬鹿にしたいわけじゃなくて、結局団地を出たって、次の団地を見つけるだけだとしても、自分の団地を見つけることが大切なのかもしれないって思ったりもするけど。

なぜあの団地を出て行かなくちゃいけないのか？って問題だけど、あの団地を母胎とするなら、人間選択して生まれるわけじゃなくて、強制的に人生スタートさせられちゃうものだし、大人になったり就職したりするのもそうせざるを得ないように外圧が周囲からかかるから仕方なくってところ

があるし。大人にならざるを得ない状況に追い込まれることとかあるでしょ。団地も実は強制的に退去させられてるだけなのかも。でも、強制される世界の中でこそ、ちょっとした主体性というかささやかな主体性みたいなものが獲得できる、それが大人になるってことなんじゃないかと思ったり。それが自分の団地を見つけるってことなんじゃないかと思いました。

一路：私はあの映画を観て、団地を出た後にどうなるんだろうって思ったけど、そうではなくて、あの狭い団地の中で戦うっていうところに意味を見出して、映画を観なきゃいけなかったね。団地も閉塞してたけど、映画も閉塞してて、こっちもその世界観に寄り添っていかないといけなかった。

鳩山：うんうん。ドラマづくりとしては、同じテイストで描くには、三十歳あたりが限界だったりするしね。それ以上の年齢を取り上げようと思ったら、子どもとか登場させないといけないし、ドラマのテイストが全然変わっちゃうというか。何て言うか、カメラの位置を変えないといけない感じがある。素敵な恋愛だけのカメラでは追えないから、別の視点でもう一台カメラ構えるみたいな。

一路：そう思うと、あの終わり方でよかったのかな。

鳩山：そうだね。意外にサーッと出て行っちゃうしね。団地を出て行った人のその後が分からない感じと、濱田岳のその後が分からない感じが重なって。ある一定の時期は一緒に過ごした人達のその後って全然分からないというか、人間関係の一過性みたいなものが描かれてるなって思ったよ。

一路：なるほどね。

（了）

（あらすじ）

『アヒルと鴨のコインロッカー』『ゴールデンスランバー』の中村義洋監督と濱田岳が五度目のタッグを組み、久保寺健彦の同名小説を映画化。生まれ育った団地から出ずに生きる男の孤独や葛藤、成長を描き、濱田は主人公・渡会悟の十三歳から三十歳までを演じきる。一九八一年、小学校を卒業した悟は「団地から一歩も出ずに生きる」と決める。中学校には通わず、団地内のパトロールを日課に日々を過ごし、やがて団地内のケーキ屋に就職。同級生と婚約もして人生をそれなりに謳歌していたが、時代の変遷とともに多くの人が団地を去り、悟は一人取り残されていく。

ちなみに薗田くんは悟の親友で、中学校でいじめを受けたことが原因で不登校になる生徒。成人してからは悟とケーキ屋をやることになる（ケーキ屋には衛生管理者の資格を持った人が必要になるが、悟は団地を出ることができないため、薗田くんがその代わりをすることになる）。

末期の水と夏の庭

しなおかななし

あの人を思い出すとき、いつも思い浮かぶのは、煙草の匂いとくちなしの匂い、そしてほんの僅かばかりの汗と布の匂いでした。にこにこと柔和で礼儀正しく、親しみやすい風貌と、面倒見のいい性格と対照的に、あの人は煙草が手放せず、一人でどこかにいるときは、いつも裏庭か縁側か、それとも換気扇の真下でゆっくりほの白い煙を燻らせていて、叔父さんや叔母さんに何度も叱られていたけれど、それでもやめることができず、わたしが見つけて駆け寄ると、悪戯がばれた子供のように苦笑して、敷石や地面にそれを押し付け、煙を消すのが常でした。

どうしていつもたばこを吸うの？

幼かったわたしがそう尋ねれば、好きだからかな、と呟きます。身体にはよくないんでしょ？と尋ねれば、少し困ったように、まあ、よくはないかな、と答えます。でも、やめたくないんでしょう？そう尋ねたら、あの人は、ふっと一瞬間を置いて、ほんの少しとろりと垂れた左目を細めながら、わたしの頭を撫でてくれました。

・・・・・そうだな。身体に悪いから、だから、煙草を吸うのかな。

まだ小さかったわたしには、その言葉の意味がよくわからなかったけど、あの人が纏う煙草の香りと、僅かに漂う草木の匂いは、周りの親戚が言うほど、決して嫌いではなくて、自分がいる時も吸ってもいいよ、と、何の気なしに呟くと、あの人はちょっとびっくりしたように目を大きく見開いて、くしゃくしゃと固く癖のある真っ黒な髪を掻き回しながら、優しく微笑んでくれました。

あの人というのは、わたしの十五歳離れた従兄のことです。

叔父と歳の離れた妹であるわたしの母は、あの人とほんの少ししか歳が違わず、あの人はお母さんのことを姉のように接していて、お母さんもあの人のことを、甥というより、まるで弟のように可愛がっていました。

そのお姉さんの娘であるわたしが生まれたのは、あの人が中学三年のまだ残暑が厳しい九月の頃で、真っ赤で皺くちゃのわたしの姿を、まるで猿の赤ん坊か何かのようだと素直な感想を口にして、叔父さんに思い切り頭をはたかれて、みんなから笑われてしまったものだと、わたしが大きくなってから、そんなことを聞きました。

生まれ立ての赤ん坊なんて、人間も猿もあまり大差なく見えるので、自分もそう思うから気にしなくていいと言うと、一応謝っているつもりなのにそういうことを言うものじゃないと目を細められて、言葉は優しかったけど、なんだか拗ねているようにも見えて、ついつい思わず笑ってしまうと、少しむっとした顔をして、左右が微妙に不揃いな視線で睨みながら、あの人はわたしの頭をぐしゃぐしゃと掻き回しました。

歳のうんと離れた従兄妹。年に一度、多くて二度、帰省の度に顔を合わせ、その間だけ親しく付き合う間柄。他の大多数のいとこや親族達と同様に、わたしとあの人の関係は、概ね、ずっとそんなところで、他と違うところといえば、わたしが他のいとこ達より、あの人によく懐いていたこと、そして電車や車ではなく、飛行機を使わなければならないような遠いところに住んでいたことぐらいでしょうか。

家族みんなでわいわいと帰省し、懐かしい祖父母の家の大きな居間で、こたつに入って足を伸ばしながら、いっしょにみかんをむいて談笑したり、テレビのチャンネルを争ったり、背中にのりかかって暴れたり、庭や廊下を走り回ったり。

傍から見れば小さな従妹に振り回される大きな従兄というふうにしか映らなかったかもしれないけれど、あの人はそれでも子供のわたしに愛想をつかすことなく、よくかまってくれました。わたしもそんなあの人を慕っていて、それは大き

くなって、追いかけっこやかくれんぼをすることがなくなっても、変わることはありませんでした。

一時、親の都合で祖父母の家にしばらく独りで預けられたときも、なにかと折を見つけては実家に足繁く通い、一番わたしの面倒を見てくれたのもあの人でした。

物心ついたときにはおとなで、ずっと昔から背が高く、幼かった自分にとって、首をうんと傾けなければ目を見られなかったあの人は、実家に顔を出すたび、玄関に駆け寄り迎えるわたしに元気にしていたかと尋ね、こくりと頷いてみたら、そうかと目を細めながら、頭を撫でてくれました。あの人の左目はいつも、もう片方の右目より、ほんの僅かに閉じていて、普段大きさが僅かに違っているはずの両の瞳が、そのときだけすうっと柔く細まり、同じように笑んでいるのが好きで、元気か、と尋ねられるたび、なにか問い掛けられるたび、必ずと言っていいほどいつも、首を縦に振りました。

あの人はとても物知りで、好奇心旺盛な幼い子供の小さなくだらない質問にも応えてくれて、学校で先生に習うよりもたくさんのことを教わりました。

近所のお祭りに行けば、金魚すくいでできるだけ多く金魚を掬うやり方や、浴衣の稚児帯が解けないこつ、射的で狙った標的を倒す方法を教えてくれて、持って帰ってきたラムネの瓶の中でころころ転がるビー玉を、不思議そうにじいっと見つめて取ろうとしていたら、誰もいない真っ暗な庭で、石に瓶を叩きつけて、粉々に割れたガラスの中からそっと取り出したビー玉を、誰にも内緒だと言って、ほんの少し、どうしてか、さびしそうな瞳をしてから、こっそりわたしにくれました。

他にも、盆踊りで踊る歌が、昔周りに認めてもらえなかった恋仲の二人が心中した話なのだということや、道端に咲く数珠玉が、糸を通して数珠飾りにするだけでなく、元々は食用だったこと、お手玉などにも使えること、草餅に使う蓬の葉は、昔は食べるだけでなく、切り傷や虫に刺された時の薬に用い、硝石を取り鉄砲に使う火薬の原料にされていたこと、七つにも手が届かない自分には知らないばかりのことを、わかりやすく、ていねいに、ひとつずつ説明してくれました。

特にあの頃は町が遠く、気軽に行けるほど近くに店がない状況で、おなかがすいたと口にすれば、家の外に連れ出してくれて、春には蓮華と土筆と野苺を、夏には桑の実を探し、草笛を吹いて犬枇杷を取り、同級生の真似をして朱色のつつじに手を伸ばせば、それには毒があるからと、やんわりと手を押さえられ、代わりに道端に咲いていた、仏の座を摘んで、花をむしって、その蜜がとても甘いことをあの人は教えてくれました。

なんでも知っているなあ、と、小さかった目を丸くすれば、知らないこともいっぱいあるよ、と、首を横に振りました。たとえば、どんな？と尋ねたら、ひとの幸せのしかたとか、と、ほんの少し、間を置いてから、仏の座を手渡しながら、あの人はそう言いました。

いつもと変わらない口調で、まるでなんてことないように呟かれたその言葉の意味を、幼かった自分にはうまく理解できなかったけど、ほら、甘いぞと、花をむしった草の蜜を薦めてくれるあの人は、自分が無心にそれを飲んでいるのを見て、いつものように笑ってくれました。

なあ、アキ。幸せか？

そう一言呟かれて、自分はこくりと頷きました。

うん、しあわせだよ。

幸せというのがどんなものかはよくわからないけれど、あの人と手を繋いで、花の蜜を吸いながら、田の畔道を歩くことは、とても幸せなように思えて、うんと高いところにあるあの人の頭を見

上げながら、こくりと小さく頷くと、あの人はどこか遠いところを見るように、ほんの一瞬目を細めて、それからくしゃっと頭を撫でると、いつものように優しく笑って、一緒に歩いてくれました。

アキ。ちょっと、こっちにおいで。

七月真ん中。もうすぐ夏休みが始まる頃、縁側で寝そべっていたわたしに、あの人が庭から声をかけ、呼ばれるままに草履を履いてぺたぺたと歩を進めると、高く積まれた砂利と植木を支える庭石の向こうであの人は手招きしていました。

家の玄関から入ってすぐの、猫の額くらいのこの庭は、庭木が好きな祖父が手入れをしているもので、石で囲われ土と砂利がていねいに敷き詰められたそこには、大小様々な草木が植わっていて。この中に入る時だけあの人は、煙草を持たず、一人で静かに草木を眺めていたり、成りかけた梅の小さな実を齧って、その酸っぱさに顔をしかめたりしていたことを知っていました。

どうしたの。そう首を傾げてよじ登り、一段高くなった庭の隅にいるあの人に歩み寄ったら、くちなしが咲いているからと、自分の背より少し高い庭木の傍に佇んで、咲いている白い花を見ながらあの人はそう言いました。

くちなし？初めて聞く名前に、目の前のそれを見上げれば、噎せ返るように強く甘い匂いに包まれて、手のひらほどの小さな花がいくつも咲いていて、蜜を吸っている黒揚羽をそっと手で払いながら、そう、くちなし、と、あの人が繰り返しました。

梅雨の頃から開き始めて、七月いっぱい花が咲くんだ。おまえが遊びに来るのはいつも盆の前だったから、見たことがないのも仕方ないかな。そんなことを言いながら、一番高い梢の方に咲いている花をそうっと摘むと、わたしに渡してくれました。すごくいい匂いがする。そう言って鼻を近づけると、そうだなあと微笑みながら、小ぶりな真っ白い花をもてあそんでいるわたしを見下ろし、ほんの少し微笑みました。

それはな、どんなに熟しても、実が絶対に開かないんだ。無花果や枇杷は、熟すと割れてしまうだろう。これは、どんなに熟しても、絶対に実がはじけない。だから、口が開かない。口が無い実だといって、くちなしと呼ばれるようになったんだ。

らせん状に巻いたつぼみと、先に落ちた花のものであろう、未熟な緑色の小さな木の実を指さして、あの人が教えてくれました。

これ、好きなの？と尋ねると、ああ、一番好きな花だと、あの人はそう答えました。大概なんでも好きだというけれど、特別一番好きなものがよくわからなかったあの人に、いっとう好きなものがあるというのはなんだか新鮮で、どこか驚いたような心持ちで手の中のそれを見つめました。

ね。これ、食べられる？食べられるよ。けど。なにか言いかけられた言葉を待たず、雄しべと雌しべをむしり、蟻がいないことを確かめて奥の蜜を吸ってみると、花の匂いとは売って変わって、蜜はどこかほんのり苦く、青臭く未熟なその味に、うえっと顔を顰めました。

そのままむしゃむしゃと花弁を頬張ると、たいして味はなかったけど、さっきの蜜よりはずっと甘くて、少しでも苦いのを帳消しにしようと頑張って咀嚼していたら、くすくす上から声が聞こえて、ふと気がついて見上げると、一生懸命花びらを食べている子供がよっぽど面白かったのか、大きな背中をくの字に曲げているあの人の姿が見えました。おまえはなんでもすぐ口に入れるなあ。そんなことを言いながら、あの人はおかしそうに笑ってわたしの頭を撫で、口元に付いていた黄色い粉を丁寧にぬぐってくれました。

半年ばかり預けられて、もう戻ってもいいと告げられて、初めて長く過ごした実家を離れて家

に帰ることになった時も、また秋ここに来ることができたら、五月の間に見つけておいた山法師の実を採りに行こう、冬に来ることになったら、庭のくちなしの実を取って、正月の準備を一緒にしようと、気落ちするわたしを励ますように指切りをしてくれました。

実際は、家に戻ってから、もう一度実家に来られたのは年の暮れで、先に採って干されていたくちなしの実を、数珠繋ぎに縛られた縄から外し、それが栗やさつまいもと一緒にことこと煮られるところを見ていることしかできなかったし、見つけておいた山法師の実を採りに行くことも、とうとうできなかったけど、なにかで色を付けたように見事な黄色に染まったきんとんは、今まで見たどんな食べ物より鮮やかに目に映りました。

アキ。元気か？

玄関をくぐるたび、いつもそう言い迎えてくれるあの人の腕に飛び込んで。夏に帰ればくちなしの花を。犬枇杷と桑を。庭の松の葉の新芽を採ってお茶をこしらえたり。冬には雑木林の茂みに隠れる冬苺を探し、祖父や叔父への果実酒作りに瓶へと放り込む傍ら、こっそり摘まみ食いをして、金槌で干したくちなしの実を割り、叔母や母のお節作りを一緒に手伝うことが、なによりの楽しみでした。

祖父母の身体が弱くなって、自分より年下だった他の従兄妹も大きくなるに従い、親族皆が集まる機会も、その都度訪れる人も少なくなって、祖母が縁側で皿の絵付けをすることも、老眼鏡をかけて居間で本を読む祖父の肩を叩くことも、ついでに隣でテレビを見ているあの人の肩を叩こうとして、まだそんなことをされる歳じゃないとむくれたように拒絶され、それがあまりに可愛かったので笑ってしまい、仕返しに思い切りくすぐられ、声も息も出せないぐらいひくひくと笑い転げていたら、傍にいた父と、歳の近い従弟にうるさいと頭をはたかれることも、段々少なくなっていっても、それでも、どれだけ年が経っても、わたしのこころの底にはあの人がいて、真ん中か隅か、どこへ行っても、いてくれることに変わりはなく、離れて暮らしている間、それだけが自分の芯をほんのり温めてくれているような気がしました。

いつか。蝉も鳴かなくなった夜。縁側で蚊取り線香を炊き、今日は星が降る夜だからと、皆が寝静まった頃、二人だけで寝転んで、時折思い出したようにふいっと横切る星を眺めながら、とりとめのない話をいくつも、数えられないぐらいして、過ごしたことがありました。

学校のこと。親戚のこと。将来のこと。最近のこと。小さい頃の思い出や、明日探しに行きたいもの。今付き合っているという女のひとのことを聞いて、いつか紹介してくれると約束してくれたところで、ふと、その時、思いついたことを訊きました。

おにいちゃん。生きているの。しんどいって思ったこと、ある？

虚を突かれたように、一瞬、両目を大きく見開いて、さあ、忘れた、と応えながら、あの人は、どうした、と問いたげな顔で、くしゃっと頭を撫でました。別に。ただ、なんとなく、と、縁側に寝転んだまま、ずっと空を見上げていた頭を、わたしは横に向けました。

最近、クラスの子がよく言うの。生きているのが、しんどいって。こんなにつらくてしんどいのに、どうしてわかってくれないのって。若気の至りの、一過性の熱病のように流行るどこか捻た台詞をなんの気なしに真似てみたら、あの人は少し嫌そうな顔をして、まあ、そういう年頃だよなと、大人びた様子で言いました。

そのしんどいって、どういうこと？わからない。テストの点が悪かったときとか、付き合ってる人にふられたときとか、サッカーの試合でうまくゴールが入らなかったり、先生になにか叱られたり・・・・・そういうことが我慢できなくなったとき、口癖で言うようになったみたい。

その大勢が、本気で死にたいと思っているより、ただ、疲れていると言うことで、自分はすごく悩んでいる、それでも頑張っていかなくてはいけない、それはなんてしんどいことなんだろうと、自分に言い聞かせているだけなのだと、周りもなんとなくわかっているから、それをからかわれることも、まともに取り合われることもなく、ただ口癖のように流行っていると、どこかで理解していたけど。

そう思ったとき、ふと、いつも笑って自分の相手をしてくれるこの人は、そうなったことがあるのだろうかと、ほんの少しだけ、柔らかに笑んだその目の奥を覗きたくて、相手をじっと見詰めたまま、思った言葉を口にしました。

……人間。生きていれば、そう思うこともあるさ。

身体に悪いから、だから、煙草を吸うのかな。

いつかそう言った時と同じ。ひどく穏やかで優しい声で、虫が鳴く音を聞きながら、しばらく空をじっと見上げて、あの人はそう言いました。その左、蚊取り線香の傍に置かれた灰皿で、ちりちりと燃える煙草の灰がぽたりと落ちるのを、視界の隅で捉えながら、裏庭で交わした古い会話をなんとなく思い出しました。

おにいちゃんでも？ああ、だれでも。おとなになっても？ああ。いつでも。アキは、そう思ったこと、あるか？無礼を叱らず、ただ横に並び、夜空をじっと見上げながら、隣で寝転ぶ自分の髪を梳く人に尋ねられ、わたしは静かに首を横に振りました。わからない。だって、生きているのがどういうことか、それもまだよくわからないから。そんなことは言わなかったけど、暗がりにぼんやりと浮かび上がる松の枝の影を見ながら、ただ黙って首だけを動かすと、そうか、と、ひとこと呟いて、あの人はそれ以上なにも訊かず、頭を撫でてくれました。

……そうだな。生きていると、つらいことも、いっぱいあるけど。また、明日も生きていこうって、そう思えたら、大丈夫なんじゃないか。

また、明日？

そう。また、明日。明日も生きてみようかな、って、そういうふうに思えたら、それで十分じゃないかな。

明日も明後日も、その次も。ずっと生きていこうって、そう思うのがつらいなら……とりあえず、明日生きてみよう。その先はまた考えようって、そういうふうに思えたら。それを何回も何回も、積み重ねることができる分だけ、生きていくことができれば……それで、十分だって。自分では、そう思ってる。

それはあの人がそう思ったとき、そういうふうに言い聞かせて、自分がなんとか生きていこうと、そう努力した証なのか。それとも、いつかそう思う、わたしに向けて言い聞かせたのか。それはわからないけれど、また明日という一言を、しっかりと刻み付けるように、何度も繰り返されました。

――――――なあ。アキ。お前は、死ぬな。

何度目かの星を見送ったところで、不意に、あの人がそう言いました。

どんなにつらいことがあっても。どんなにかなしいことがあっても。お願いだから、お前は死ぬな。お前だけは、お願いだから、おれより長く、生きてくれ。

ひどく静かに。穏やかに。いつもとまったく同じ口調で、けれど、とても真剣に、夜空を並んで眺めながら、あの人はそう言いました。

まるで不治の病でも患った人のように、そんなことを急に言い出されて、思わず、いったい何のこ

とかと、弾かれたように顔を見ると、あの人はなんてことなさそうに、星の数を数えながら、それでもさっき口にしたことを、取り消そうとしませんでした。

無遠慮で無神経な子供の戯れ言を、ただ叱り飛ばしてくれていたら、そんなことを軽々しく口にするものじゃないと、自分のクラスの教師のように、目を吊り上げて、頭を叩いて、子供はなにも考えず、笑って生きていればいいと、一方的に、頭ごなしに、怒鳴ってくれれば楽だったのに。そうだよね、と口だけで笑って、なにも考えていないように、振舞って生きていけたのに。

それを許してくれないこの人は、どんな気持ちでさっきの言葉を言ったのだろうと、心の底で思いました。にこにこと笑って空を見上げ、ただ穏やかに髪を梳く、その仕草の裏側に、どれほどの葛藤や、ひとには言えない本心を、抱えて生きているのだろうと、ほんの少し気になりました。

あんなに、ひどく真剣に、誰かになにかを告げられたのは、生まれて初めてのことでした。

――――――本当を言うと、わたしはずっと、自分のことがきらいでした。

玄関で靴の泥を落とす棕櫚のようだと笑われた、ぱさぱさと艶のない髪も、いくつになっても痩せ過ぎで全く肉が付かない骨も、愛想の欠片もありはしないと睨まれる、色が薄くきつい瞳も、男が生まれると思い込んでいて、それ以外なにも考えていなかったからという理由で付けられた自分の名前も、見知らぬ誰かに微笑まれても、うまく返せない自分のことも、嫌いで嫌いでしかたありませんでした。

いつしか、そんなことを話すと、あの人はきょとんとした顔で、何の気なしに言いました。

そうか？いい名前だと思うけど。

まるでどうってことないみたいに、天気の話をするように、自然と普通に応えながら、田んぼの畔道を俯き歩いていたわたしの小さな手を取って、実家に帰り着くまで引いて、話しかけてくれました。

あの人がそう言ってくれたおかげで、男とも女ともつかない自分の名前が好きになりました。それでもその名前で呼ばれたくないと言うと、一文字削ってあの人が付けたあだ名を呼ばれることが、いつか心地よくなりました。手が冷たい人はそのぶんこころがあったかいのだと、体温が低く死人のようだと学校でからかわれたとき、慰めるように笑いながら手を温めてくれたから、指が冷たい自分のことを少しだけ好きになれました。

一度だけ、大きくなってから、二人で会ったこともありました。

星を見上げてから四年後。わたしが中学三年の頃、高校の推薦入学の試験を終え、なんとか無事に合格し、そのご褒美にと墓参りを兼ねた短い旅として、一人里帰りしたときに、歳を取った祖父母の代わりに、車を持たないわたしに一日、あの人がつきあってくれたのです。

お盆ではなく、暮れでもなく、夏に一人で帰ること。互いの家族と一緒にではなく、二人だけで過ごすこと。

それはまるで、一人で実家に預けられていた頃の焼き直しで、他に誰もいないことを少し寂しく思う反面、久し振りに時間を独り占めできるということが、年甲斐もなく嬉しくて、それが向こうにもわかっていたのか、あの人はほとんど丸一日、ゆっくりわたしの相手をしてくれました。

花と線香を持ってお墓をきれいに掃除して、墓参りが終わった後は、少し離れたところにある大きな植物園に行って、街に買い物に出かけ、建物の屋上にある大きな観覧車に乗って、家で飼っているという猫へのお土産を手に、至極上機嫌なわたしを、あの人は家へと呼んでくれました。

体質のせいで動物を飼うことができない祖父母の代わりに、捨てられていた子猫を引き取って育

てているというあの人の部屋に上がり込むと、鬼退治に行く男の子の名前が付けられた黒猫は、ふかふかと長い毛を膨らませて、すりすり寄ってきたかと思えば、手を伸ばすとあっという間に逃げてしまうので、夢中になって追いかけまわして。

押入れに頭を突っ込んで隠れるその子を捕まえようとしていると、そのくらいにしてお茶でも飲もうと肩を引かれ、猫にしがみつかれた時、ずるりとずれて緩んでしまった包帯を、慌てて押さえつけました。

しまった、と手をもう一度、押入れの中に戻そうとすると、あの人が、包帯が外れたその先の、手首に走る傷の跡を、凝視しているのがわかりました。

……それ、どうした。

幾筋も刻み込まれたそれから、決して目を反らさずに、じっと覗き込むように問いかけられて、息が止まるのを感じながら、思わず左手を隠そうとすると、腕を掴んだ指に力がこもり、ぎり、と音さえ立てそうなぐらい強く握り締められました。怒っているのだと気が付いて、顔が見られなくなりました。

なんでもないよ、と、俯いて答えると、子供でもわかるような嘘に騙されてくれるわけはなく、骨に食い込む指の力がほんの少し増したけど、頭ごなしに嘘つきと、罵られはしませんでした。

少し怪我をしてしまったから、不格好なのを見られたくなくて、隠してた。いつ、そんなところを切った？手入れしようとしている時、風呂場の剃刀で切ってしまった。傷は？自分で塞いだ。二、三度やったら、慣れてしまった。口を突いて出る言葉は、決して嘘ではなかったけれど、決して真実全てでもなく、その裏側に隠された意図を、応えられるまでもなく、あの人は理解しているようだったけど、とても、表に出せませんでした。

いつから始まるようになったのか、それは正直、わかりません。あの人と二人縁側で寝そべり、星を見上げた夜の前に、既に始まってたのか、それとも約束を交わした後、鉄の塊に乗って、また、家に戻ってから、どれぐらい経ってからのことだったのか、今でもよく思い出せず、無理やり思い起こそうとしても、砂嵐のような映像と、途切れ途切れの断片の記憶しか、脳裏には蘇りません。

仕事が忙しくなったのか、父の帰りが遅くなり、家を空けるようになったこと。母がよく泣くようになり、なにをしても喜んでくれず、八つ当たりのように叱られては、なにが悪かったのかわからず戸惑っていると、余計にひどく罵られて、ひとしきりそれが収まると、涙をぼろぼろ零しながら、何度も何度も謝られること。逆に自分が謝れば、お前は謝るなと言われ、少しでも口ごたえをすればまたひどく喚き泣き出すこと。それを父に相談しても、ただ黙るように言われ、お願いだから耐えてくれと、頭を下げて頼まれることも。

いつか落ち着き終わるから。あと数ヶ月。あと半年。あと一年経てば、終わるからと、何度も何度も言い聞かされ、そのたび口を噤まされ、ただただ笑うようになり、笑うためだけに笑い、昔のように、変わらぬように、なに一つ変わっていないように、昔の笑顔と仕草をなぞり、それでも年の暮れには実家に帰り、前と同じ顔をして、皆と顔を合わせるのも、その時だけは笑顔に戻り、何事もないような振りをする、父と母に合わせるのも。

誰にも何にも口を閉ざして、何度も何度も繰り返すのも。

いったい何時から始まったのか。どんなきっかけだったのか。それが、もうどれぐらい、ずっと、ずっと続いているのか、そんなこと、とうに忘れたから。

あの日交わした約束を、決して違えないように。ただ、死にたくない、死にたくないと、何度も何度も刻み込み。身体と腕に強く走る傷と痛みの向こう側の、皮一枚切り裂いた先にある、岸へ渡らないように。ぎりぎりの淵の一歩手前で、まだ、

そっちに行きたくないと、自分に言い聞かせなければ、踏みとどまることもできないくらい。息をするのが、つらくて、つらくて。それでも必死に生きているのは、全部、あなたの言葉を守るためなのだと、口には出せませんでした。

とうに逃げて家の外に出ていってしまった猫を見送り、肩に指を食い込ませたまま、黙って俯くわたしを見て、そうかと一言呟いてから、あの人は、手を離してくれました。

前までの空気が嘘のように、ひんやりと固く冷え込んで、誰もなにもしゃべれないまま、なんだかひどく惨めな気分で、自分の荷物を置きました。

それから、通夜のような食事を終えて、お湯を使って、寝間着代わりの服に袖を通して、猫が帰ってくるからと鎖をかけた扉を少し開いたままにして、六畳の部屋に布団を二枚敷き、互いに一言も声を出さないまま、黙って灯りを消しました。

布団に入っても寝付けず、黙って耳を凝らしていると、外は昼までの天気と違い、台風が近づいているせいか、ほんの少し風が強まり、がたがたと窓を揺らして鳴らし、並木の梢や葉の間を、ひゅうひゅうと抜けていく音が、なんだか息絶える前の、人の呼吸のように聞こえて、表に出たままの猫が無事に帰ってくるかどうか気がかりになり、鎖がかけられ、半開きにされたままの玄関の扉を眺めていると、あの人は寝入ってしまったのか、静かな呼吸が聞こえてきて、ほんの少し、気が楽になり、黙って猫を待ちました。

何時間か経った頃、かたりと物音がして、にゃあ、という声と共に、真っ黒な影がドアの隙間から現れて、桃太郎、と声をかけ、布団からこっそり抜け出すと、外は降り出していたのか、ほんの少し湿った身体をぶるぶると震わせて、しゃがみこんで差し出した両腕に、駆け寄り飛び込んできました。

玄関の鍵を閉めてから、萎んでしまった長い毛並みを手近にあった布切れで拭い、あの人にしてもらったように、昔のことを思い出しながら、優しく梳かして膨らませていると、眠れないのか、と、唐突に、あの人の声が聞こえました。

驚いて身体を竦み上がらせ、手で握っていた布を落とし、猫が足元に降り立った瞬間、反射的に振り向くと、暗闇の中でうすぼんやりと、カーテンの向こうから布越しに差し込んでくる青い街灯を浴びて、暗がりの中で仄白く浮かぶ夜具の中、白いシャツを着たあの人が寝転びながら、こちらをじっと見上げているのを感じました。起こして、ごめん。と呟けば、いや、起きていたと返されて、なにを言うべきかわからないまま、するりと抜け出していく猫の行方をどこか寂しく感じました。

心配かけて、ごめんなさい。たったひとことそう言えばいいのに、それすらできない自分が酷く惨めで、情けない生き物に思えて、石のように重い沈黙の中、逸らして俯いたままの顔を上げることができませんでした。

おやすみ。最後にそれだけ言おうとして、僅かに口を開いたら、それより先に、布団に戻りかけたわたしに、あの人が手を伸ばしました。

そんな顔、するな。それだけ言って、頬に触れて、床にぺたりと腰を下ろしたまま、呆然としているわたしの顔を、半分身体を起こしながら、手首の傷を見られてから、一度も合わせられなかった視線が、青白い薄闇の中でわたしを捉えていました。

それは、いつものような親しみも、陽溜まりのような温かさも、慈しむような笑みも余裕もなにもない、岩みたいな静けさと、その奥に押し殺すように渦巻く、ひどい苦しみと葛藤と、血を吐くようなかなしみを、堪えて耐えているような、傷ついた瞳をしていました。

お前だけは、お願いだから、おれより長く、生きてくれ。あのとき告げられた意味をようやく感じ取るより、この人にそんな目をさせてしまったことを、本気で悔やみました。

……あ。

喉の奥からなにか、言葉を搾り出すより早く、あの人は黙って、微笑んで、髪と頭に回していた指をそっと引きながら、小さかった頃のように、半分空けた自分の寝床に、わたしを寄越してくれました。

思わず、身体を起こしかけて。それを押しとどめるように、身体をぐるりと引き込まれると。まるでこどもをあやすように、まるでこどもがあまえるように。横向きに覆いかぶさるように。背中に両腕を、強く、強く回されました。

なあ。アキ。幸せか？

ひさしぶりに潜り込んだ懐は、とても広くてあたたかくて。しいて言えば見上げる位置と、互いの頭の高さだけが、少し変わっただけなのに。腕の中に閉じ込められながら、寝巻きのシャツに顔を埋めて息を止めているわたしに、あの人はそう問いかけました。

……わからないよ。

そう呟いて、それ以上、なにも返せずに、強くしがみつきました。

あのときどうして肯けなかったのか、今でも不思議に思います。

幸せでないはずはないのです。あの人のそばにいるときは、いつもとても心地よくて、あの人と会うときは、それだけで心が浮き立って、あの人が自分のために使ってくれる時間、笑いかけてくれる顔は全て、幸せだとしか思えなくて。

だからお墓参りをして、供え物のおまんじゅうを、きれいにしたばかりの墓石の前、埃っぽい夏の日差しを浴びながら、二人並んで食べたときも、色とりどりの花や草木が咲き乱れている公園を、まるで本当のきょうだいみたいに一緒に歩いたことも、おおきなおおきな観覧車で、座席がぐらりと揺れるたび、人に気づかれない程度に眉を寄せて、苦虫を噛み潰したような仏頂面で、窓の外に広がる夜景を睨むその顔に、思わず笑って吹き出して、それからこちらを睨みながら、それでも決して不満は言わなかったあの人に必死であやまり続けたことも、あの人の腕に閉じ込められることも、全部、文句なしに、幸せだったはずなのです。

それを否定してしまったら、この世から幸せなことなんて何もなくなってしまうだろうというくらい、とても楽しくてうれしくて、幸せだったに違いないのです。

けれど、それと同じぐらい、そのときはとてもかなしくて。胸がつかえて苦しくて、息をすることができないくらい、声を出すことができないくらい、なにもかもどうしようもなくて。たった、そんな一言しか、絞り出すことができませんでした。ただ、ずっとそうやって、息をひそかに詰めながら、こたえられない言葉の意味を考えながら、汗ばんだ布に声を押し付け泣くのを堪えるしか、自分にはできませんでした。

深く潜り込んだ寝床の底、まるでなにかから逃げるみたいに、なにかから必死に隠れるみたいに、わたしはあの人にしがみつき、手足を強く絡めたまま、あの人は私の首と背を、骨が折れそうなぐらい抱きました。

火傷しそうなほど熱い指で髪を梳かれて。ほのかな汗と煙草の匂いが染み込んだ布に顔を埋めて。なにもこぼさないように。なにもこわさないように。ただ、ただ、歯を喰い縛って。声とも言葉ともつかないなにかと、目から溢れそうな涙を必死に堪え、わたしは、精一杯、あの人とずっと、一緒にいました。あの人はなにも言葉を発さず、ただ、それを聞きながら、腕の力を緩めないまま、わたしの傍で眠りました。窓の向こうで風が吹いて、扉がかたかたと鳴って。そうした、全部。なにもかも。遠い出来事のようでした。

あの人には、弟が一人いたのだと、叔母からそ

う聞かされたのは、ずっと後になってからのことでした。

わたしがまだ赤ん坊で、あの人は高校生にもなっていなくて、顔も知らないその弟が中学二年生だった頃。

一つ違いの二人がどんな兄弟だったのか、それはわたしにはわかりません。

確かなことは、二人がある日喧嘩して、日も沈んだ秋の暮れ、弟さんが家を飛び出して、少し離れた交差点で、左折してきたトラックとぶつかり、命を落としたということだけ。

その喧嘩がどういう内容だったのか。原因はなんだったのか。どうしてその弟さんは、トラックに轢かれたりしてしまったのか。

それを知る術は、もうなくなってしまったけど、弟の死があの人に暗い影を落としていて、その埋め合わせをするように、まだ幼かったわたしのことをかまうようになったのだと、仏壇に花を手向けながら、叔母はわたしに語りました。

その人もわたしと同じように、空っぽになったラムネの瓶のころころ転がるビー玉を、興味深く見ていたのでしょうか。ところかまわず走り回って、年の差も構わずちょっかいを出して、調子に乗りすぎてしまったところを上からぎゅうと伸し掛られて、ごめんなさいとか、たすけてとか、必死に叫んでじたばたあばれて、それでも誰にも助けてもらえずぴいぴいわめいているところを、心の底からおかしそうに、くつくつと笑われていたのでしょうか。

そんなことを考えたけど、答えはなにも出てこなくて、ただ思い浮かぶのは、寝間着のシャツに顔を埋め、鼻いっぱいに汗と布と、まとわりついた煙草の匂いを吸い込んだ夜と、火傷しそうなほど熱い指で優しく髪を梳きながら、骨が折れてしまいそうなほど強く背を抱き締めてくれた、あの大きな手のひらだけでした。

――――――あの人が死んだと聞かされたのは、高校の入学式を終えたばかりの夏。暮れに帰省することが叶わず、あの日寝床を共にしてから顔を合わせないまま、盆に三日だけ実家に帰ると告げられて、終業式を迎えた頃。一人早く帰宅した自分が、家の中で鳴り響く電話を取り、受話器の向こうで、明らかに色を失った叔父が、あいつが死んだと、たった一言、そう伝えた時でした。

交通事故で、ついさっき、病院で息を引き取った。今日中に通夜をやるから、もしよかったら、訪ねてくれ。

そう伝えられてから、仕事の最中だった両親に急いで連絡して、荷物をまとめて、飛行機に飛び乗り、日が暮れる頃到着した、相変わらずの祖父母の家の、お化けが出そうで怖いからと、近寄ることを避けてた仏間の、きれいに整えられた畳の上で、白木の箱に収まって、あの人は静かにそこにいました。

電灯の灯りの下、そのとき、あの人がどんなふうに眠っていたのかは、今でも思い出せません。ただ、見慣れない真っ白な着物に身を包んでいて、身体は花で囲われて、部屋の空気がびっくりするほど、冷たかったのを覚えています。

真っ赤な目で涙を堪える叔母と、強く拳を握り締めて、険しい顔で耐えている叔父、沈痛な声で話す祖父母。

わたしにできることは、祖母が用意した喪服に袖を通し、両親と共に、通夜の支度を手伝うだけでした。

生まれて初めて着た喪服は、袖の長い真っ黒なワンピースで。何年ぶりかに女の子らしい格好をして。いつもならそれを笑ってくれるはずの人がいないことを考えないように、葬儀屋の人達と一緒に、絶え間なく家を訪れる大勢の弔問客の相手をし続けました。夜が更けていくにつれて徐々に人波も減っていったけど、足りなくなってしまいそうな香典返しをもう少しだけ足しておこうと、廊下の奥にある物置部屋に予備を取りに行こう

とすると、すぐ手前のガラス障子の向こうで、台所から、突然、ものすごい音が聞こえました。

――――――あなたの子供は生きてるじゃない！どうして私のところだけ、私の子だけ、皆死ななきゃいけないのよ！あの子が死ななきゃいけないのよ！私は、私は、どうして全部、全部、無くさなきゃいけないのよ！

机ががたりと揺れる音と、母がやめてくださいと言う言葉。叔父の必死の静止の声と、辺りに並べられたものをひっくり返すような物音。仏間の大勢の弔問客にも聞こえているだろうにも関わらず、家中響き渡るような声で、血の滲むような慟哭と共に叔母は言葉を震わせました。椅子が倒れ、ものが砕けていく音と、その中に響く言葉にならない悲鳴と悲哀を聞きながら、わたしは独り、廊下の端で一歩も動けませんでした。

ごめんね。おばさん。わたしだって、あげられるものなら、あげたかった。そう言おうと思ったけど、言葉はかたまりになって、うまく口から出てきませんでした。そのかわり、息もうまくできなくて、喉を鳴らすこともできず、閉められたガラス障子の影で声も上げないまま、ただただ、黙って突っ立って、部屋の中で吹いている嵐が通り過ぎるのを待つしかできませんでした。

夜通し続くかと思ったそれは、叔母が落ち着くに従い、徐々に弱まったけれど、ろうそくの番をすることもできないぐらい誰も彼も憔悴して、複雑な表情を浮かべた最後の弔問客を見送った後、身内だけの食事を済ませ、深夜を大分過ぎる頃、ようやく全員が床につきました。

あのとき本当にみんな眠っていたのか、それはわたしにはわかりません。

ただ、家の最後の灯りが消えて、しんと静まり返ってから、わたしは布団を抜け出して、ひたひたと廊下を裸足で歩き、誰もいなくなった仏間に、通り抜けた縁側の外に広がる庭に、静かに足を踏み入れました。

くちなしが一番強く香るのは真夜中だと、いつか教えてくれた通り、噎せ返るような匂いの中、ぺたぺた素足で砂利を踏み、今まで見たこともないくらい、たくさんの真っ白な花弁がいくつもいくつも咲いているくちなしの前に辿り着くと、群がる雀蛾を払い、ようやく指先が届く先の、一番立派に咲いた花を、硬く鋭く尖った枝ごと、手でばきりとちぎり折りました。

通夜が終わった後の仏間は、蝋燭の明かりだけが揺らめいて、線香の匂いが満ちる部屋の中、冷たい空気を震わせて、できるだけ音を立てないよう、枝を無理やり折った時に傷だらけになってしまった指で、拙く、そっと棺桶の蓋を開くと、そこには、以前と少しも変わらない顔で、あの人が横たわっていました。

あんなに見通しのいい場所で、運転の仕方を間違えて、頭から壁に突っ込むなんて、普通なら有り得ないわよね。

通夜の席で、顔も知らない遠い親戚のおばさんが呟いているのが聞こえました。

庭を手入れし、墓に参り、実家から市内の方にある自分の家へと向かう途中。昔、いつも野花や草木の蔓を探し歩いた道で、なんの変哲もないカーブを曲がり損ね、今は誰も住んでいない廃屋と、その前に立つ電信柱に、車でまっすぐ突っ込んだのだと。それが原因で、救急車で運ばれる途中、息を引き取ったのだと。

通夜の準備を始め、祖父母に簡単な事情を聞いてから、取り乱した叔母の代わりに弔問客の相手をすると、空になった湯呑を下げて障子を閉めた向こう側、今まで会ったこともない大勢の親類や数え切れない隣人が、ひそひそと声を潜めるように呟く声が嫌でも耳に届きました。なにも聞こえない振りをして、静かにその場を離れながら、それでも、表に出ているときから、ずっと、閉ざされた棺の向こうにいる、あの人に問い

かけていました。

あなたは、みずから命を絶ったのですか？

明日も生きてみようかと、思うこともできないぐらい、息を続けていくことがつかれてしまったのですか？

いつかわたしに語ったことを、繰り返すこともできないぐらい、なにもかも嫌になってしまったのですか？

あの日、わたしを乗せてくれた車と一緒に、廃屋の壁に突っ込んだ時、この世界は、あなたの瞳に、どう映っていましたか？

ひとには死ぬなと言ったくせに。どんな悲しみがそこにあっても、耐えてくれと言ったくせに。あなたはあっさり、わたしのことを、こうして置いていくのですか？

あなたがわたしの本当の気持ちを、手首に刻み込まれた悲哀をわからないと言ったように、あなたの人生の悲哀も、教えてくれなかったら、なにもわかりっこないのです。

いくら胸の内で問いかけても、何度声をかけようとしても、あの人は答えようとせず、いつものように繋いだ指を握り返してくれることも、どうした、と首を傾げて、こちらを待ってくれることもありませんでした。

額にガーゼを当てていて、顎と頬には小さな擦り傷が残っていて。白い着物に包まれた、事故に遭ったはずの身体は、とても大怪我をしているようには見えなくて、もし、耳元で叫んだら、いつものように顔をしかめて、子供じみた悪戯をするなと、叱りつけてくるのではないのかと、そんな考えがよぎるほど、ただ、眠っているように見えて。

真っ暗で蒼い闇の中、氷のように冷え切って、もの言わなくなったあの人に、わたしはそっと口付けました。

ひんやりしていて硬い感触。生まれて初めての口付けは、冷たく、微かに苦い味で、紙のように白い頬と、唇を落としたそこに触れると、ひやりと冷たい頬の上、ぽつんとその一点が、そこだけ熱を分けたように、ほんのり温もっているようで、するりと撫でた指先は、そこから冷えていきました。

指が口もとを掠めると、僅かに湿って濡れました。死人の喉が渇かぬよう、水を含ませておくのだと、後になってから知ったけれど、そのときはそんなことも知らないまま、ああこれが死に水というものなのだなと、ぼんやり遠い頭で考えて。

開かれることのない目蓋を前に、この人は死んでしまったのだと、ようやく、理解することができました。

それからどうやって朝を迎えたのか、正直、あまり覚えていません。

ただあの人の首の横に折り取った花を供え、棺の蓋をそうっと閉めて、軽く手を合せてから、部屋を出たことだけは覚えていますが、それから自分がどうやって寝床に辿り着いたのか、どういうふうに夜が明けるまで過ごしたのか、よく思い出せないからです。

その一夜が明けた後、葬儀はなんの滞りもなく、あっけないくらい簡単に過ぎました。

真っ当に考えれば、ろうそくの番も誰もいなかったはずなのに、それまで見たこともない花が突然現れたのですから、次の日棺を開けた瞬間、祖父母や叔母、叔父は相当驚いたかもしれませんが、あの人が生前誰より懐いた自分を可愛がってくれていたこと、それを一番好きな花だと言っていたことを察したのか、手に包帯と絆創膏を巻いて後ろで俯いているわたしを、周りはそっとしておいてくれました。

通夜より多くの参列客の相手をし、意味のよくわからない読経を唱え、火葬場へ行き、あの人が灰になるまでの数時間、待合室から外に出て、山あいの石垣、足元に咲く花を摘み、長いお箸で骨

を拾った後、最後の一人がいなくなってしまうまで、真っ白い灰になってしまったあの人の傍に立ちました。

家に帰ると、色々あるのか、大人達は皆まだ慌しく動いていて、何か手伝おうとすると、戻るようにと諭されて。

喪服を着たまま、わたしはひとり、使われることのなかった離れで、倒れるように寝転びました。

そこは普段、帰省するたび、あの人が使っていた部屋で、大勢親族が集まったとき、いとこ全員でごちゃ混ぜになって、いっしょに眠ったこともありました。

あのときはたしか、五、六人ぐらい集まって、部屋の端から端まで布団を敷きつめて、真ん中がいい右端に寝ると場所取りに散々手間取って、一番年上のあの人はいつもまとめ役で、位置決めが終わっても騒ぎは収まらず、テレビをつけたり、とりとめのないおしゃべりに花を咲かせたり、わいわいがやがやと騒々しい部屋の空気をなんとか抑えようと、珍しくあの人が大声を張り上げて、そしたら枕投げになって、もう少しで襖を破りそうになったら、お父さん達にも叱られて――――

――――

頭をよぎる光景は、どれもとてもありふれて、けどすてきなものばかりで、すごく大事なはずなのに、楽しかったはずなのに、ひとつひとつ浮かぶたび、ざくりと胸を切りつけて、がらんどうになった胸からは、ひゅうひゅう風が吹いていて、じくじく痛む傷からは、まっしろな血がこぼれました。

なあ、アキ。幸せか？

いつかの言葉が蘇り、わからないと思いながら首を振り、その言葉から逃げるよう、強く強く目を閉じました。

わからない。わからない。わからないよ。

今は誰もいない部屋。目がくらむほどたくさんのしあわせな思い出に囲まれて。わたしは一人床の上、なにか壊れてしまったように、開いた両の目玉から、ぽろぽろ涙がこぼれました。仰向けになって見上げた天井、変わることないその景色は、小さかった昔より、ずっと近くなったはずなのに、なぜか、とても遠くに見えました。

あなたが逝った数年後に祖父もこの世を去ってから、身体を弱くしていた祖母が叔母達の家に移り住み、時折叔父が手入れをするものの、殆ど誰も訪ねる人がいなくなったこの庭で、夏が来る度あなたを思い出しに来ることが、当たり前になってから、どれくらいの月日が経ったか、もうあまりよくわかりません。

ただひとつだけ言えるのは、わたしはまだあなたより年下で、背伸びしなければ届かなかったあのくちなしの天辺の梢に、まっすぐに指を伸ばすだけで届くようになるくらい少し、背が伸びたということだけです。

あなたは肝心なことは、なにも教えてくれないまま、姿を消してしまいました。

ラムネのビー玉の取り方も、盆踊りの歌の意味も、庭や外に咲く花の名前も、ひとの隣で眠るときの体温と空気のあたたかさも、なにもかも教えてくれたのに、あなたがなにを想っていたのか、なにを思って死んだのか、それだけは最後まで、とうとうわかりませんでした。

わたしはあなたに、なにかしてあげることができましたか？

あなたがいなくなってからも、世界は変わらず回っていくし、わたしも歳を取っていきます。もし今、向こう側に行ったら、あなたはどんな顔をするでしょう。どうしてこんなに早く、と怒るでしょうか。それともなんだか困ったように、いつものように笑うでしょうか。あなたの末期の水を盗ったわたしのことを、ちゃんと見てくれるでし

ようか？

詮無いことだとわかっています。けど、それだけが、今のわたしの空想の種なのです。

そうしていつか、おとなになって、あの日のあなたと同じ背丈と、ろうそくの数を数えたら、あなたはもう一度、わたしの頭を、やさしく撫でてくれますか？

それだけを楽しみに、くちなしの花が咲く頃に、またもう一度、ここへ来ます。

どれだけ大きく育っても、決して割れない実のように。どれだけ中が熟しても、決してはじけない種のように。あなたがくれた思い出を。教えてもらったたくさんのことを。ほんのひとひらの感情を、こころに抱えて生きています。

ほんの少し黄色く染まったくちなしの花に手を伸ばして、あの日あなたがしてくれたように、静かにむしってもぎ取ります。大きく開いた六枚の白い花弁の中心に顔を寄せ、噎せ返るような匂いを吸い込みながら、雌しべにそっと口付けます。

なあ。幸せか？

昔のように、舌を伸ばして、中の蜜を舐めながら、僅かな苦味に顔を顰めて、匂いはあんなに甘いのに、と、胸の内で呟いて、誰もいない庭の隅に、その花びらを落とします。食べれば甘いと知っていても、それを口に含むことは、たぶん、もう二度とありません。

――――――わからないよ。

萎れて地面に溶けるのを待つだけになった白い花びらを見届けて、喪服の裾を翻し、昔より大分低くなったくちなしの木に背を向けます。

どこかで蝉が鳴いているきいきいという声を聴きながら、玉砂利をそっと踏みしめると、石が擦れる音に混じって、どこかで小さく、あの人が、笑っているような気がしました。

サンプル

マチコ・オー・ソドックス

木村鼻子　三十歳

自分で言うのもナンですが
私は本当に冴えない女でした…

男の方には
好かれたためしがありませんし

せいりてきに
むり

はい

職場でもいつも
陰口を言われています

木村さんって
なんかー

なんかー

そんな私の楽しみといいますと
飼い猫のヨネちゃんと遊ぶこと

ニャー

ただいま♡

そして…

夜中の通販番組を見ることでした
そんなある日…

うそ〜
これが
私〜？

まじか!!

肌年齢
7才!!

0120-000-xxx

VVC

福

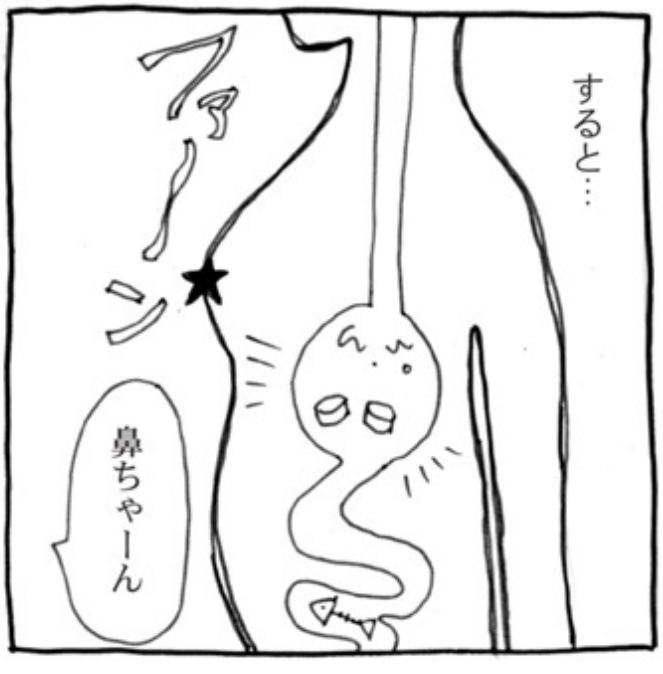
…

変わりたい貴女に…
とってもふしぎ
ミラクル？
コラーゲン！
ドカーン
とってもふしぎ
ミラクル？
コラーゲン
千葉県
山田さん
57才
飲んだその翌日から色々アレでー
主人に、スリムになったねー
キレイになったねーって言われてー
肌荒れもしなくなったんです！
社会人の息子と歩いてたら息子の友人から
「えー！お母さん？妹さんじゃなくてー？
マジッスカー俺全然いけますよー！」
なんて言われてーつい…ねぇ？ウフフフ…

そんなの…広告だから…
そう思いましたが
この前は宝クジまで
当たっちゃって
これからハワイに…
もしもし
ニャー
何かを変えたかった
私としましては
心惹かれてしまったのも事実です

その3日後…
ふしぎ通販

何かを変えたい…
そんな祈りを込めて
そのサプリメントを飲みました
ごくごく


すると…
ファーン
鼻ちゃーん

鼻ちゃん！
いつもごはんをありがとう！

ヨネ？ なんで？ どうして喋ってるの？
あのね
※ ねこをこのようにもつのはよくない

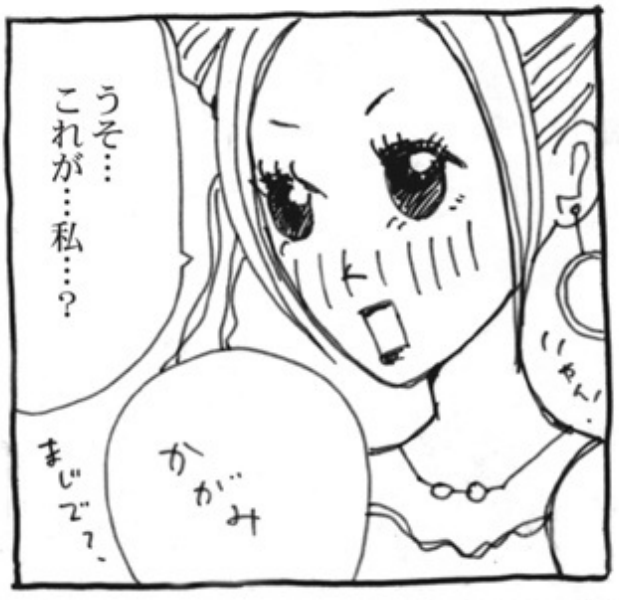
鼻ちゃんふしぎなおくすりのんだでしょ？ だから私たちこうしておはなしができるし
私は鼻ちゃんのおてつだいをがんばるから鼻ちゃんはまほう少女としてたたかうんだよー！

鼻ちゃんはえらばれたんだよ だから新しい鼻ちゃんとしてがんばって！
なんですと？

じゅもんをとなえてごらん？
いけいけ ゴーゴー！
きみはそれをしってるはず

そんな…何言ってんのじゅもんなんて…
クク
くわっ
んもう！
くるっ
ジュテームジュテーム アップル・パイン！

ぽんっ！
えっ…
きら
きら
きら
それはさながら…
私が幼い頃に憧れた魔法少女そのものだったのです！


うそ…これが…私…？
かがみ
まじで？

かわいいよ…鼻ちゃんはかわいいんだよ…
にゃおー
これからがんばろうね！
うお

そして…

ポカッ
どろぼう？
ギャオ
それから私は…地球の平和を守るため日夜悪と戦っています

貴女も変われる!!
あきらめないで！
…そんなとってもふしぎミラクル？コラーゲン！お電話番号は…
もしもし
大五郎
fin

クラシック教養のお時間

天沼 太郎

第5回 演劇的なコンヴィチュニーの演出

たちまちのうちに、舞台に吸い込まれた。古代エジプトで繰り広げられているはずの舞台は、遠く現代の私の日常、私の社会人生活を照らし出した。

演目 ヴェルディ*1 作曲 「アイーダ」
演出 ペーター・コンヴィチュニー
演奏 ウォルフガング・ボージッチ指揮、東京都交響楽団
日時 2008 年 4 月 17 日
会場 Bunkamura オーチャードホール

ドレスデン国立歌劇場で見た「フィガロの結婚」は最高だった。同じような体験をしてみたいと思い、また、ちょうど東京に住まいを移したこともあり、時々オペラに出かけるようになった*2。しかし、どうにもオペラにはなじめない。何より、オペラはわざとらしい。登場人物はどうしてみんな、あんな大げさに自分の思いを歌い上げるのだろう？あんなに簡単に傷つき、怒り、悲しむのだろう？

時代もあるかもしれない。いわゆるオペラ*3 が作曲されたのは 19 世紀前後。表現を濃いめにしないと、観客は反応してくれなかったらしい。あるいは、ストーリーなどどうでもよく、素晴らしい歌手たちが、見事な歌声を聞かせてくれればそれで良かった時代なのかもしれない*4。

しかしながら、演奏だけ素晴らしいオペラを楽しむことは(私には)ちょっと難しい。前回のように演奏があり得ないくらい素晴らしければ良いが、なかなかそういう公演には巡り会わない*5。

そんな時、もっとも先鋭的な演出をすると評判のペーター・コンヴィチュニー(以下、コンヴィチュニー)*6 のオペラに接することができた。

舞台は最初から型破りである。普通はわらわらと群衆を交えて進む本作品*7 が、ソファーと主要なキャスト数名のみで始まる。将軍ラダメスはなんだか子どもっぽいし、王や神官はいかにもうさん臭い。

思うところの多い舞台だけど、特に印象に残ったのは以下の3つ。

1. 凱旋のシーン
通常のオペラでは、大群衆を交えて、迫力の合唱が堪能できる(らしい)。ところが、この演出では、戦勝祝いは、王、王妃、神官3人の乱痴気騒ぎ。そこへ戻ってくるのは、ボロボロになった馬のぬいぐるみを抱えた、これまた血だらけの将軍ラダメス。片付けをするの召使いとして働く敵国の王妃アイーダ。戦争は政治の世界だし、支配者・被支配者の関係を示している。

2. 将軍ラダメス、王、神官、捕虜アイーダの対立
まさに人間社会である。忠を取るか仁を取るか？また、アイーダを愛しているといいながら、アイーダの祖国と戦争できることに驚喜する幼稚な将軍ラダメス。しかしこれは、誰しも思い当たる話ではないか？また、神官ランフィス、王妃アムネリスの卑劣なこと！

3. 生き埋めにされ、死を待つ将軍ラダメスと王妃アイーダ
本作のクライマックス。CD で演奏時間を確認したところ、わずか10分前後の部分だった。しかし、この部分はもっと長かったように記憶している。きっと強く印象に残ったせいだろう。王の命に背い

た将軍ラダメスは、生き埋めの刑となる。ところが、刑場の中(?)に、王妃アイーダが待っている*8。2人は死ぬことにより、天界で結ばれることを夢見る。2人が天を仰ぎ見るその時、舞台の壁が倒れ、都内だろうか、夜景が奥のスクリーンに映し出される。その美しいこと*9。美しいけど、見ているものにとってそれは何とも悲しく痛ましい光景である。なぜなら、2人にとって希望であり、生きることでもあるそれは、死でしかないからだ。
また、最後の最後、2人の前に天使の姿をした王妃アムネリス(2人を死に追いやる張本人)が現れる。死を決意した2人は、あのアムネリスをも許せるのだ。

コンヴィチュニー演出の特徴は、舞台が過去のものであれ、それを現在の設定に読み替えたものであれ、いずれも現代人が抱えてる問題を呼び起こす*10。果たして、過去の脚本家たち、あるいは作曲家たちは、同じような問題意識を持って作品を作ったのだろうか？

おそらく大半の人たちは、似たような問題意識を持っていたと思う。最初に、「オペラはわざとらしい」と書いた。けれど、そのわざとらしさには、理由があるのだろう。一つには、当時の観客に物語を楽しんでもらうため、もう一つは、素直に問題を提起することへのためらいではないか。そういう問題意識を持っていなければ、作品など作れまい。そして、コンヴィチュニーは、作品を読み解くことで、その問題意識を掘り当ててしまった！

念のために書いておくと、同様の問題意識に突き当たった(と思われる)演出家は過去にも現在にも存在する。しかし、それをコンヴィチュニーのように娯楽性を持たせたまま作品として表現できた演出家は少ない*11。

アイーダを見ながら、果たしてこれはオペラなのだろうかと考えた。もちろん、オペラといって決して間違いではない。オペラの枠をはみ出したという言い方もできるだろうけど、強烈な才能は常に枠をはみ出すもの 12*。それより、演劇的な要素を活用してるのだと思う。演劇として表現する場合、わざとらしいオーバーアクションは、作品を滑稽なものとするばかりで、観客を本質から遠ざける。

しかし、もし作品の奥に潜む問題をあぶり出し、現代風の衣装をつけて観客の前に差し出せるとしたら？我々観客は、その中に自分たちの生活を見つけ出すだろう。彼は我々に問いかけるのだ、人類が昔から、自分たちに問いかけてきた問題を。そう、コンヴィチュニーが演出するオペラは単なるオペラではない、哲学なのだ。

＊1：ジュゼッペ・ヴェルディ(1813-1901)。イタリアの作曲家。オペラ作品がよく知られている。「椿姫」などが有名。ワーグナーが同年生まれのためか、そちらの方が日本では有名。また、イタリアにはもう一人、ジャコモ・プッチーニ(1858-1924)という有名なオペラ作曲家がいる。ヴェルディの重厚さに対し、プッチーニはおしゃれで新しい物好き。
＊2：とはいえ、オペラのチケットは高すぎてそんなに出かけられない。高い席はあってもいいけど、ホール端の席など、ずっと安くていいと思う。
＊3：乱暴な判断基準だけど、「勧善懲悪」的な作品と勝手に決めてしまう。古典派のモーツァルトから、ロマン派のプッチーニ、ヴェルディなどをその範囲とする。人を殺して罰せられるのが勧善懲悪的な作品。同じことをしても、「犯人にも相応の理由があるのでは?」と考えさせられるような作品が、20 世紀近くになって作られるようになる。
＊4：今のオペラ歌手たちは、素晴らしい歌唱力だけでなく演技力も要求される。大変だ。
＊5：モーツァルト作曲のオペラ、「イドメネオ」公演に行ったことがある。演奏に不満もあったけど、それ以上に「神の怒りだ」「神のお許しだ」と大騒ぎする群衆に閉口した (何度も出てくる)。おかげ

で、どうにも舞台に入り込めなかった。
＊6：父親は、東ドイツで活躍した指揮者フランツ・コンヴィチュニー(1901-0962)。彼の指揮したベートーヴェン交響曲全集は、躍動感があふれるのに、いかにもドイツ音楽という重量感がある素晴らしい演奏。早世したことが惜しまれる。
＊7：ヴェルディのオペラには、やたらと群衆が出てくる。衣装やセットも豪華。まともに上演したらギャラが大変だろう。詳しく書かなかったけど、今回の公演は全体に非常にシンプルなセットだった。
＊8：生き埋めされてるのに、何故土の中で会話が交わせるの？なんて質問は不可。
＊9：昼間に、高層ビル上階から都内を眺めたことがある。灰色をしたコンクリート塊が、乱雑に立ち並ぶとても美しいとはいえない風景だった。2人は幸福な死後の世界を夢見るが、それもまた、実は叶えられない望みであることを示しているのかもしれない。深読みし過ぎ？
＊10：本作の他に、コンヴィチュニー演出のオペラ、チャイコフスキー作曲「エフゲニー・オネーギン」を見た。人間社会のどうしようもない矛盾を描いていて、救われない舞台だった。もちろん、これまた素晴らしいオペラだった。
＊11：ワーグナーの古くさい舞台の殻を破ったパトリス・シェロー、モーツァルトのオペラを大胆に現代に移し替えたピーター・セラーズなど。前者は今となってはその衝撃は薄れてしまったけど、ピーター・セラーズの演出は今でも強烈である。
＊12：圧倒的な才能は、しばしばジャンルを超える。「私を束ねないで」と詠んだ詩人がいたし、ジャズ界の帝王マイルス・デイヴィスは自ら「ジャズと呼ぶな」と言ったそうである。また、他分野技術の転用は、しばしば新技術の発見につながる。

猫婆と犬畜生

よみびとしらず
詠人不知

これは犬のような男と猫好きの婆、それから猫好きの婆と同居している猫が織り成す、他愛もないお話であります。

…いや、猫好きの婆は少なくともおちょこ1杯分程の愛を同居猫に注いでいるであろうから、他愛もないという書き方は、さて如何なものか、と、冒頭での暴投な書き出しを万年筆で黒く塗りつぶすか否か、ハナからしくじり思う次第でありますが、そもそも小生は携帯電話というものを用いて、親指を忙しなく動かしながら執筆活動をしているわけでして、万年筆で黒く塗りつぶすもなにも、この方、万年筆なんか1本も持ってすらいないよ、我ながら何を抜かしとるんだ、わっはっは、と、1人笑いをかました後で、1人ツッコミ、1人飯、1人あやとり(趣味)も少々飽き始めた頃には、編集部からの原稿催促と思われる1本の電話が、忙しなく鳴り出したのでありました、@チャイニーズも喰わぬボロアパート。

不動産屋さんの人気物件、蓋を開ければ人気がないのは何故…。今日も、格安の家賃とあってか、陳さんが食いつきました。

「ココ、ミタイ!!」

からの、

「…ココ、イラナイ。」

に至るつかの間のあいだ、小生は編集部からの原稿催促に慌てふためき、嗚呼、ガリレオガリレイ!急がば回れ〜、と、犬

が己の尻尾を永遠追いかけるかの如く、本当にガリガリ地球と共に回りだしたわけですから、このくそ狭いお部屋でそんな事をやりだした犬畜生は、右足の小指vsタンスの角となり、グフゥ…ウゥゥゥゥとうめき声を上げて倒れこみ、うっすうすの壁を隔て隣にいた不動産屋さんと陳さんは、商談も単なる冗談に変わり、無言でご帰宅するはめになるのでした。チーン。

…さて、犬好きの…、いや、犬のような男と…、ね、猫好きの婆、…それから、猫好きの婆と同居している猫の…、すっ、少し他愛もあるお話ですが、読者諸君も編集部のお方も、うっすうす感じておられるとは思いますが、小生は、すっ、すこ〜し、デタラメ狂言師の節がありまして、おっちょこちょいのおたんこなす、矛と盾のオンパレード、物語も全く進んでないよ、と、いうわけですが、チータ精神で、ちょいとご勝手に始めさせて頂きます。失敬。

この物語の設定ですが、お国は日本、と、させていただきますが、今やグローバルな時代でありますので、読者様のお好きなお国でご想像されても全く差し支えはございません。

また時代も平成、と、させていただきますが、いろいろな読者様がいらっしゃると、甚だご勝手にご期待して、老若男女、と、言葉を書いただけでも舌を噛みちぎりそうな具合ですので、これまたお好きな時代でご想像されても全く差し支えございません。

…では始めまして、犬のような男は、犬山犬夫という、どう考えてもフィクションでしかないような名前の男です。

現在、38歳、未婚、無色透明からやっと抜け出し、手に職を、人生に色を、と、いう事で、日夜配送業に勤しむお方です。

この配送業は、あらかじめ決められた地区の、あらかじめ決められたお宅を、1日に50件程回るルート配送で、犬山はそれこそ犬の如く、自分の持ち場を庭のように駆け回るのでした。

10人10色というように、一日に50件も駆け回れば、50人50色、月曜日から金曜日までの5日間で、50×5＝250色と、もはや無色透明だったはずの犬山も、いろいろな方と出会い、いろいろな色が混ざり、果たして己が何色なのかすらわからぬ具合でした。

その何色かわからぬ犬山を、真っ白なキャンバスの如くリセットしてくださるのが、金曜日の50件目、つまりは1週間の最後にお会いするお方でした。

そのお方は、これまたフィクションでしかないような名前の女で、猫田ネコ、80歳、猫と同居する猫好きの婆でした。

つずく！？

ギミー・ダイアローグ

一路 真実

彼氏と別れた。いや、実際はもっと前から関係は終わっていたはずだ。

「一度、離れてみよう」

一度離れるということは、関係を見つめ直す期間を空けるだけだ。そう言われたのであるが、離れている間に実は浮気していたということが分かった。最近知り合ったような女ではない。中学生時代の初恋の人だったのだ。また元に戻ると勝手に信じ込んでいた私は、激怒した。

「関係を見つめ直す期間だって言ってたのに、浮気するってどういうこと？」

「浮気じゃないんだ」

じゃあ、本気なのか、と思った。

「離れようって言った時、もうその女と連絡取ってたの？」

「うん」

悪びれずにそう言うと、

「っていうか、携帯電話見たお前も悪いだろ。プライバシーの侵害」

無造作にリモコンでテレビを点けたので、すかさず取り上げ、電源ボタンをぶつりと押してやった。

「初恋の人がちょっと自分の方を振り向いたからって良い気になりやがって」

私の発言には無反応のまま、口先をとがらせて携帯電話を開いた。

「せいぜい、その女に夜道に注意しろとでも言っておけばいいさ」

彼氏はチリチリにカールした髪をごそごそとかいた。フケが飛んだのか、Tシャツをまくりあげて背中をかきむしりながら言った。

「お前、イタ電かけんなよ」

ふいに見えたお腹に生えているもじゃもじゃした毛も、もう見おさめかと思ったら涙が出そうになった。しかも、彼氏の頭の中はもう相手の女が占めていて、私の入る隙間なんかありやしない。

「もう無言電話かけたもん」

そう言うと、ばりばりとかきむしっていた手が止まる。慌てて携帯電話を耳に当てた。

「前に気味悪がってた無言電話あったじゃん」

電話口で甘ったるい口調の女が応答しているのが漏れ聞こえる。胸糞悪いぶりっこの声は既に電話で一度聞いている。

「あれ、前の彼女だから。ごめん。なんか携帯見たらしくて」

あぁ、前ね。そうか。もう今日から私は前の女なんだわ。

映画を製作するサークル活動で知り合った彼氏だった。当然のようにサークルにも顔を出しにくくなって、家にこもるようになってしまった。カーテンの開いていない真っ暗な部屋で、がちゃがちゃして変に色あざやかなテレビだけがぼんやり部屋の中で光っている。カーペットの上に這いつくばった私はテレビの方へ顔を向けていて、まるで光に集まる小さな虫のようだった。ざわざわした声が耳に入るだけで心地よい。何も考えられないし、考えていなくても誰にも何も言われない。

でも、突然無性に不安になる。目をつぶると、こんなふうに寝てばかりいる自分が生きていていいのか分からなくなる。このままこの部屋で死んでいたら、私はいつ発見されるのだろうと思い始めた。数日たっても誰も見つけてくれないだろう。せめてあいつと繋がっていたら、私は見つけてもらえたかもしれないのに。

あいつももういないんだ。

「カケイ、全然サークルに顔出してないじゃん」

みんな、掛川景子を略して、カケイと呼ぶ。入学式で隣の席になって以来、同じサークルに入り、ほぼ毎日顔を合わせて昼食を一緒に食べるミオがいなければ、まともに大学さえも行けていなかったかもしれないと思う。

「だって、洋介と別れたんだもん」

ミオは笑った。

「だからあいつはやめとけって何度も言ったじゃん。カケイは男見る目がないからね。よし、じゃあ合コンしよ」

「ミオは彼氏がいるじゃん」

「いいの。カケイのためにするんだから」

そう言って、ミオは飲み会を開いてくれた。階段を下りて行くと、地下にバーが広がる。全ての壁が棚になっていて、ワインで埋め尽くされている。唇の端にピアスが刺さっているミオは、グラスを高く上げた。

「今日は、ワイン飲み放題だから。まぁそんなに緊張せず、楽しく飲もう」

ミオの知り合いをランダムに集めてくれていたが、気を遣ってくれたのか、大学の知り合いは一人もいなくて気楽だった。そういうふうにさりげなく人を引き合わせてくれるところが、ミオの良いところだ。人との付き合い方も何だかおしゃれで、田舎から出てきた私にとっては東京育ちの女性の象徴のように感じる。センスの良い店にも明るく、こうしてよく連れて来てくれる。

適当に男女が二人ずつになっていき、ミオはバーのマスターと話し始めた。私はワインカウンターへ向かった。セルフサービスで好きなワインを注いでいける。実を言うと、私はミオみたいに自然と人の中に入っていけるタイプではない。一人になれば無性に不安になるのに、隣の人に気軽に話しかけたり、自分の話を始めたりすることなんてできない。だからついこうやって席を立って、用のないトイレに行くこともあ

る。今日はワイン飲み放題で良かった。ワインカウンターに行けばいい。行けるところがある。
赤、白、シャンパンといろいろな瓶が並ぶ。一つずつゆっくりとラベルを眺める。特に詳しいわけではないので見たって分からないのだけど、席に戻って「大学はどう？」なんて聞かれるよりはましだ。
「どれ飲むの？」
顔をあげると、合コンメンバーにはいなかった男性が隣で見つめていた。
「実はあんまり詳しくなくて」
すると、彼は一本の瓶を取り上げた。
「結局、飲み放題のワインにそんなに良いレベルのものなんてないんだよ。とりあえずテイスティングして、おいしいと思うやつを飲みなよ」
そう言って、グラスに少しだけ注いでくれた。深い赤色がグラスをくるりと回る。雰囲気だけ、少し匂いを嗅ぐような振りをして口にふくんだ。
「はい、じゃあ次」
水でグラスをゆすぐと次から次へといろいろな種類のワインを入れてきた。彼のグラスにも同じものを注いで飲む。
「あんまり分からないや。最初のものが一番おいしかった気がする」
彼は最初に注いだワインを取った。口の端を少し上げると、青白くてごつごつした大きな手を私の頭の上に乗せた。
「もう少し一緒に飲もうよ」
彼と丸いテーブル席に移動した。高さのあるスツールに座れるように、片手を取りそっと私の腰に手を添えた。自然と引っ張っていくその手についていけば間違いないような気にさせる。何だかふわふわしてきて、余裕のある表情と喋り方に吸い込まれる。
「サークルで知りあった彼氏と別れたばっかりなんだ。景子ちゃんは映画に興味があるの？」
彼は純平という名前で、他の大学に通う学生だと知った。
「結局、年配の人からこれが古典だから観ろって言われると反発しちゃうんだよね。でも、やっぱり観ると面白いでしょ。古典って言われるゆえんってあるんだよ」
「そうそう、たぶん前の世代の人がおせっかいに教えてくる感じが嫌なんだよね。自分で見つけてこないと受けつけないの」
意外に映画の話が弾んで、頭の隅であいつの影がちらついた。あいつともこうやって映画の話で盛り上がって、気づいたら一緒にいるようになったなあ、と。何度も暗い部屋で思い出しては泣いたあの顔がふと頭を過ぎると、少し胸につっかえるものがあって私は思わず口をぎゅっと結んだ。
「どうした？」
彼は大きな手で私の後頭部を触ると、自分の胸に抱き寄せた。知らない香水の匂いが鼻に入ってきて、生温かい胸板が私と異なる性を持っていると思わせた。
「こんばんは。どなた？」
頭の上でミオの声がした。私は思わず彼から離れる。彼はミオに言った。
「友達なの？」
「そうよ」
「この子、俺にくれる？」
「ほら、行くよ」
ミオは私の腕を引っ張って立たせようとしたけど、私は椅子に座ったまま動かなかった。大きな目をさらに見開いて、ミオは私に顔を近付け耳元でささやいた。
「カケイの好きなようにしていいけど、嫌だったらちゃんと断りなよ」
そして、私は合コンの途中で他の男のところに行ってしまったのだった。
何だかとてつもなく酔っ払ったけれど、妙に頭だけは冴えていた。全体的に視界はぼんやりしていて、時折「大丈夫？」と問いかける純平の顔もよく見えていない。でも、それを悟らせたくないとなぜか必死に難しい話をしようとしていた。私は、今ちゃんと難しい話だって考えられる状態にあるのだ、と自分に言い聞かせるように必死になっていた。

「景子ちゃん、これからどうする？」
純平はそう訊ねながらも、歩を緩めることなくどこかへ向かっているようだった。半歩速いスピードについていくのも、酔っ払っていることを隠すためなんだと勢いに任せてついていった。
ふいに通り過ぎた時に見えたミニシアターの看板が、心臓をぎゅっと掴んだ。あいつと映画を観た最後の場所だった。一人ずつ分かれて小さなソファに座るような、一風変わった映画館だったから余計に記憶に残っている。二十席もないくらいの、小じんまりとした空間で、東京の真ん中で一体どこに迷い込んだんだろうと思った。薄ぼんやりとした暗い色調の画面のなか、カットのない長いシーンがひたすら続くような映画だ。しかも、暗がりのなかで隣から、よく耳にするあいつの寝息が聞こえ始めたときは癪に障った。私を置いていかないでよ、と思った。あとでわざと細かいシーンの話をしてやろうかなんて、どうやってあいつをこらしめようかと思いながら、ふと隣のソファの寝顔を覗き見た瞬間、心臓があたたかい血液でひたひたになってゆくのを感じた。みんながスクリーンに集中しているときに、私だけがあいつを見ているっていうこと。でもそれに誰も気付いていないこと。私をこの空間においてけぼりにして、意地悪したいけれどまだここでできないじれったさ。何だかそういう曖昧なものが胸に入りこんできて、じわじわと温められてしまった。
ふいに私は歩みを止めた。もう、だめだ。私は酔っ払っている。だからもう、許してください。視界がさらにぼんやりしたのは、あのときの温められたものが、なぜかいま目から出てきてしまったからだ。そういうことです、と純平に言いたかった。
「どうしたの？」
だから、そういうことなんです。
でも、うまく言葉にできないまま、私は路上で泣き始めた。純平は困った様子で、きょろきょろと辺りを見回して、私の顔を覗き込んだ。
「どうして、男は浮気をするの？」
違う、こんなことが言いたかったんじゃない。
「どうして、男ってずっと昔に好きだった人のことを覚えてるの？」
自分の涙と口から溢れた言葉がちぐはぐで、それが腹立たしくて余計にまた涙が出てきた。
「どうして、私は男がいつまでも思ってる『好きだった人』になれないの？」
純平はさっきと同じように、私を腕のなかに入れて後頭部を撫でた。涙やら鼻水やらが彼の服についたかもしれない。でもそこは酔っ払っているということで許してもらおう。そう思いながら、彼の背中に手をまわした。
彼のベッドの下から、女性と一緒に写っている写真が出てきたとき、何だか嫌な予感がした。部屋に入る前に、ちょっと散らかってるからと外で待たされた。慌てて片付けたようなふりをしていたけど、本当は彼女の私物をベッドの下に隠しただけだったのだ。
朝早く目覚めた私は伸びをした拍子に狭い一人用のベッドから落っこちそうになって、床に手をついたとき、隠されていた写真立ての角に触れた。だいたいこういう場所にあるものって嫌なものだと直感したが、もう止められない。引っ張りだすと案の定そういうことだった。何が嫌かって、写っている女がまたモデル系の細身の美女で「これは勝てない」と一瞬で分かってしまったことだ。
「ちょっと起きて」
んんっと唸って寝ぼけている彼の目の前に、写真立てをかざした。
「これ、彼女？」
彼は一瞬目を開けたが、またつぶると指でこすりながら枕に顔をうずめた。
「彼女なんでしょ」
背中に乗って押しつぶそうとすると、彼は顔だけ横に向けた。

「そう」
一言発すると、また無言になった。眠りに落ちる瞬間に、深い穴から腕を掴んで引きあげた。
「じゃあ、何で私を家に連れてきたの？」
何も言わない。
「彼女がいるって言わなかったじゃん」
彼が目をこすりながら起き上がった。
「うるさいな。景子ちゃんだって俺についてきたじゃん。そうやって悲劇のヒロインぶるのやめてくれる？」
今度は私が黙る番だ。
「景子ちゃんは、男が浮気するって言ってたけど、女だってそうでしょ。ちょっとさみしいときに優しくされたら、ほいほいついて行くじゃん。どっちが悪いなんて、そういうのを性差で決めるのはどうかと思うよ」
「それ、私のこと？」
「いや、誰のこととかじゃなくて。一般的に」
私は何も言わずにベッドから降りた。散らかった洋服をかき集めようとするけれど、昨日触られた後頭部が何だか軋んでいく。分かった、ワインによる二日酔いだ。
昨日部屋に入った時は、ここが世界の果てだなんて勝手に思っていたけれど、この冷めた空気は私を異質なものとして排除しようとしているようだった。肌寒い朝は、部屋のなかにいてもちくちく攻撃してくる。振り返ると、純平は再び布団にもぐりこんで私のことを見つめていた。
「寒い」と再びベッドに戻ろうとすると、純平は腕を広げて布団を開けた。布団でできた三角形の隙間に私は背中からぴたっと納まり、純平は私を抱きしめて乳房を触ってきた。
男も女もどっちも悪いなら、もうどうだっていいや、と考えることを止めてしまった。純平の動く指が、私の中のピアノの弦を弾くように、時折体全体が痙攣してしまう。
「感じてるの？」
彼の両手が私の二つある膨らみにかぶさり、楽しそうにエチュードを奏でる。強く激しいときと弱く切ないときをうまく絡める。これは本番の演奏ではない。あくまで私の上で弾かれるのはエチュード。
昨日の夜、何だか分からないまま始まって、気付けば彼が果てて終わっていた。連弾をしようと盛り上げるだけ盛り上げておいて、自分で勝手にエンディングを独奏してしまうようだった。今朝はどうだろうと思ったけれど、やはり同じだった。
彼は体を離すと、洋服を着てベランダに出た。煙草を吸っている。
何が楽しくてここにいるんだろう。私が洋服を着て鞄を手に取ったとき、ベランダから純平が戻って来て言った。
「帰る？　駅まで送ろうか？」
「いいよ。大丈夫」
「ならいいけど」
家から出るつもりなんてないなら聞かないでほしい。

踏切の前で立ち止まったとき、どうして一人なんだろうと思った。暗い夜道は二人で歩いてきたのに、明るくなったら一人ぼっちになっていた。知らない街にぽつんと一人置いていかれてしまった。電車が大きな音を立てて通り過ぎ、踏切が上がると車と人が同時に動き出す。
どうして一人で歩いているんだろう。どうしてこの街に来てしまったのだろう。どうして愛される人になれないんだろう。どこを間違ってしまったんだろう。どうして生きているんだろう。浮かんだ疑問が消えることなくぐるぐると回り続け、胸を埋め尽くす。
踏切が上がると、歩道のない線路の上を一斉に車と人が動き始めた。離合する人が多すぎて、隣を通る車に思わず接触しそうになる。眉間に皺を寄せた。早く向こう側の道路に出ようと足を踏み出したところに、後ろから肩をたたかれた。
少しだけ純平かもしれないと期待したのは、別に本当に追いかけてくると思ったか

らではないんだ。ただ、この街が知らない街だったから。彼以外に私を形作ってくれる人を知らなかったから。振り返るときに、どんな表情をすればいいんだろう。笑っても怒ってもおかしいし。私の普通の顔ってどんなふうに筋肉を動かして作っていたっけ――。ここまでほんの一瞬の間に、思いが脳のシナプスを駆け巡った。

振り返ると、純平ではない長身の男が立っていた。痩せ型の男で、真っ黒いシャツを着て、肩までつきそうな髪をしていた。サークルの知り合いかと思い、反射的に「久しぶり」と笑顔を見せそうになった。しかし、男の口元に血がべっとり付着しているのに気付いて、顔が冷たく張りついた。男はわっと言葉を羅列して早口で怒鳴ってきた。私の頭のコンピュータはその金切り声でショートし、何の知り合いだったかをひたすら考え続けた。

その時、カンカンカンと踏切の音が鳴り始めた。バーがゆっくり閉まっていく。コンピュータは、とうとうこんな顔は見たことないと結論を出した。私は走り出す。バーをくぐり抜けて振り返ると、男は反対側の道で仁王立ちし、こちらに向かって「バカ」と叫んだ。いや正確にはそういう口の開き方を見ただけで、声は聞こえなかった。電車が駅に入り込んできたからだ。私は急いで駅の階段を駆け上がった。

しばらく音信不通だったのに、洋介から突然メールが届いた。

「今日、家に行ってもいいかな？」

別れてから、何度もメールしようと思ったけれど、その度にぐっとこらえてきたのに、こんなに容易く壁を飛び越えて来るなんてと少し不満に思ったが、すぐに返信した。

「何しに来るの？」

「置いてたＤＶＤを取りに行きたいんだけど」

「郵送しようか？」

「いや、そっちに行く用事あるから寄るよ」

本棚に立てかけてあったＤＶＤを手に取り、表紙を眺めた。ストーリーを目で追っていくと、同時にあいつと過ごした日々がちらつく。二人の思い出の映画といえばこれだった。記念日が来る度に一緒に何度も観返した。

ふと横にあったＤＶＤを手に取った。サークルであいつと一緒に撮影した短編映像が記録されているのだと思い出した。味気ない白い表面に油性ペンで書かれたタイトルが踊る。あいつがコピーして全員に配ったのだった。映像はこだわるくせに、カバーデザインには気を遣わない、どこか詰めの甘いやつだったなと思うと、自然に口元が緩んだ。

キンコンとインターフォンが鳴り、慌てて玄関まで走る。すっと軽く一呼吸してドアノブを回した。

「よう」

相変わらずのもじゃもじゃ頭が出てきて、軽く手を挙げた。穴が空いて裾がほつれたいつものジーパンを履き、よそよそしく目を泳がした様子は、どこかぎこちなくて思わず笑ってしまった。

「これでしょ」

手に持っていたＤＶＤを渡すと、おうと返事をして受け取ったが、またきょろきょろと目を動かし、全くこっちの顔を見ようともしない。

「他にもあった？」

そう聞くと、玄関のドアで隠れていた方の手で、ビニール袋を私の顔の前に突き出した。

「ちょっと話したいことあってさ。中に入ってもいい？」

ビニール袋にはりついた水滴が中身を透かして見せる。缶ビールとスナック菓子だった。

洋介に短編映像が入ったＤＶＤを見せた。

「懐かしいな。見ようよ」

「一応、洋介の初監督作品だもんね」

「そう。そんで景子が助監督」

「この時、まだ付き合ってなかったよね？」

映像が始まると、ピントがずれたようなぼんやりしたセピア色に画面が染まった。焦点が合うと、ベッドに腰掛ける男性が映し出された。

「景子はこの俳優のこと好きだったじゃん」

「違うよ」

奇をてらったような角度から撮影された、彼女役の女優がアップで映った。思わず吹き出したところを捉えた、柔らかい女優の表情を少し長めのカットで撮った後、真顔になって首をかしげ、またほほ笑む様子が映し出された。

「こういう自然なカット良いよね。本当はもっと長くてもいいって思ったんだけど、みんなに反対されたね」

洋介は何も言わずに何度か肯くと、エンドロールが流れ始めた時に口を開いた。

「ここが一番重要」

エンドロールにメイキング映像を入れていた。俳優やスタッフのにぎやかで学生らしい雰囲気が漏れ伝わる。

「この子の家で撮影するって言って早朝に押しかけたよね」

「お母さんがおにぎり出してくれたな」

単に文化祭に出品するための数分しかない映像だったが、撮影に何週間もかけた思い出が一気によみがえった。撮影の時だけでなく編集の時も喧嘩になり、何度も作り直したし、何度も泣かされた。でもこの作品を撮ったからこそ、洋介と二人で過ごす時間が増えていったのも事実だ。

私も映った。真剣な表情で何かを見つめているところを隠し撮りされていて、少し頬を膨らませて近付き、右手のこぶしをカメラに振りかぶって笑った。その時、画面の端に洋介が映った。私がカメラに向かっているのを、背後から優しい目で見つめていた。

「俺は撮影の前から景子のこと好きだったもんね」

そう言うと同時に、洋介がアップになった。へらへらして能天気で、芸人のようなポーズをとった。

「また、そんなこと言って」

私が言うと、映像が終わり、漆黒の画面になった。テレビに反射して座っている今の二人の影が映って、なんだか昔の自分たちと比較されているような気がして恥ずかしくなった。

「ＤＶＤのこともあったけど、これ、見せようと思ってさ」

洋介がポケットから取り出したのは、小さな家の形をした置き物だった。

「これどこで見つけたの？」

「うちの近くの骨董品店の軒先にたまたま置いてあったから、思わず買っちゃって。そしたらお前に見せたくなって」

それは、私が好きな映画のワンシーンに出てくる、フィンランドの作家が作った置き物だった。映画を一緒に観た時に、いつか二人であんな家に住めるといいね、なんて感傷的に言ってしまったことがあったが、まさかそれを覚えているなんて。

「よく覚えてたね」

目に涙が溜まり、そう発するのが精いっぱいだった。幸い、ＤＶＤを観るために電気を消していて薄暗いことに救われた。

「覚えてるよ。お前のことなら」

「うそつき」

言い終わる前に、洋介は私の肩を抱いて引き寄せた。彼の温かい体と髪を震わせる息づかいに、ぎゅっと身を固くした。少し強張った私の様子に気づいたのか、彼は腕をまわして強く抱きしめると、そのままカーペットに押し倒した。

最初に、今の彼女とのことを聞かなきゃいけないと思ったけれど、洋介の荒い息づかいが耳元で聞こえる度に、そんなこともうどうでもいいではないかという思いが波のように寄せ返した。洋介の動きに合わせると、波の上をゆらゆらと漂うような気持ちになる。力で押したって勢いあまって海の中に沈んでしまうだけだ。私が洋介と一緒にいてうれしいという、もうその気持ちだけでいいと思った。

腕枕をして、洋介はそっと髪を撫でた。

私を見つめる表情に、罪悪感が少し透けて見えるような気がした。でも、無言の時間が続くと、彼が今の彼女のことを考えているような気がして怖い。何も言わなければ、この手を払って帰って行きそうな不安が暗闇に増殖していく。聞きたくなかったけれど、聞かずにはいられなかった。

「彼女とうまくいってるの？」

驚いたピエロのように目を少し開いて私を見つめる。

「そんなこと聞かなくていいよ」

その答えに、何て質問をしたのだろうと後悔した。自分でさえ、どんな回答がきても反応できる自信なんてなかった。何も言えずにいると、彼なりに回答が必要だと思ったのか、口を開いた。

「まあね。そこそこ」

そんなふうに言われてしまったら、後に引けなくなってしまった。

「こんなことして怒られないの？」

こんな質問をしてしまったら、私が二股を許したように聞こえるではないかと思ったけれど、もう口から出てしまった言葉に合わせるしかなかった。

彼の体がここにあって、中身は別のところにあるということ。それを受け入れなければならない。そう思えば思うほど、彼の体だけしか自分は愛してはいけないのだと感じてしまうのだった。

大教室の後ろの方に座っていた私の隣の席に、授業時間が終わるぎりぎりになってミオが滑り込んだ。

「最近どうしてる？」

「どうって、別に」

ミオには言えなかった。

私はいけないとは思いつつも、その後も頻繁に純平とも洋平とも関係を続けていたからだ。何も知らないミオは、私が出席カードを渡すと、サンキュとにっこり笑って受け取った。ミオの左薬指にゴールドのリングが光っていた。

「もしかして、ペアリング？」

「そうなのよ。結構良いお値段だってよ」

「いくら？」

ミオの手を握ると、色の白い繊細な指に大きく強調されるリングが輝いていた。角ばったデザインが普通のリングとは違う。隠しきれない個性を出す感じが、ミオらしいと思い、胸が少しざわついた。

「ナイショ」

すっと手を抜きとると、カードを書き始めた。

「この後、もう授業ないんでしょ？」

「うん。この授業って単位とりやすいとはいっても、土曜に一コマだけってちょっと失敗したよね」

「確かに。代返頼める友達いるといいけど、あんまり授業出てないから友達少ないしね」

ミオはハハッと口を広げて笑うと、

「今日ちょっと行きたいところあるからついて来ない？」

と誘って来た。

ミオが歩くままに一緒に歩調を合わせ、電車に乗り、着いたところは猫カフェだった。

「ミオって猫好きだっけ？」

「いいや、全然」

そう言うと、慣れた手つきで、スリッパに履き替えたり手指を消毒したりして、部屋に入って行った。私も見よう見まねで準備を整え、ミオの後をついて恐る恐る部屋に入った。

そこにはいたるところにくつろいで寝そべる猫たちがおり、思わずふっと鼻から息が漏れた。ミオは奥のソファに腰掛けると、猫に気を取られている私を手招きした。

「あそこにいるお兄さん、イケメンでしょ」

見ると、長髪の若い男性が無表情で猫を抱え、毛並みを整えていた。

「アルバイトの人？」

「そう。彼氏が猫好きで一度ここに連れて来られたんだけど、猫よりあのお兄さんを眺めるのに夢中になっちゃって」

「そのリングもらってるんだから、彼氏を大事にしようよ」

「今日こそは連絡先交換して帰るわ」
そう言うと、勝手に遊んで来いとばかりに私に手を振った。ミオのハンティングを邪魔しないように、猫じゃらしを手に取ると床に這いつくばって、近くにいた猫の目の前にかざしてみた。白く毛の長い猫は私が動くとちらと目を向けたが、基本的には無愛想に丸まったままだ。移動して別の猫に猫じゃらしをかざすが反応は同じ。良い具合に人に慣れているのか、獲物を狩る必要がないと悟っているのか、ぐうたらしすぎだ。体を撫でると、少し嫌そうな顔をしたが、撫でたければどうぞというように動かなくなった。
ふと見ると、部屋の角にいた女の人に多くの猫が群がっていた。手に持っている餌を狙っているようだ。いいなあと思いながら見ていると、横のソファに座っていた男性に声を掛けられた。
「マタタビが少しだけ配合されている餌らしいですよ」
黒々とした堅そうな髪に、人の良さそうな丸い顔をした、小太りの男だった。黒い縁のある眼鏡が光り、どんな目をしているかいまいち見えない。膝に灰色の猫が乗っており、すやすやと眠っている。私に話しかけている間も、一向に休むことなく猫の体を撫でていた。
「やっぱりああいうのを買わないと、寄って来ないんですかね。初めて来たから、どんな感じで猫に接すればいいか分からなくて」
そう言うと、私が手に持っていた猫じゃらしを見て、
「ここの猫たちはあまり猫じゃらしでは遊ばないですよ」
と言って、足元に転がっていた小さなボールを手に取り、タオル地で作られた猫のおうちの方に投げた。その動きに合わせて、俊敏に猫の顔が動いた。
「この家の天井部分の穴からボールが出てきて、スロープを通って反対側に落ちるだけの仕組みなんですけど。この子はよく反応しますね」
この子と言われた猫は、無愛想だった白い猫だ。先ほどの顔とは正反対の生き生きとした目でボールを見つめている。
「猫カフェ、よく来るんですか？」
「週に一回程度ですかね。仕事が休みの日の暇つぶしですよ」
そう言うと、男はにこりと笑った。そのあまりに純粋な表情に一瞬ひるんでしまった。
（この笑顔は作りもの？　それとも本心？）
心がすさんでいるのか、純粋な反応に出会うとそれが偽物ではないかと疑ってしまう。演技ではないかと勝手に想像してしまう。とまどいながらも、こちらも笑顔を作るように顔の神経に指令を送るが、うまく作れたかは自分では分からない。耐え切れず、ミオの方を見ると携帯電話を片手にいつもは見せないほど満面の笑みでお目当てのお兄さんと話しこんでいた。
「お友達ですか」
「ええ、まあ」
相変わらず、猫の背中を撫でる手を休めない。灰色の猫は気持ちよさそうに男の膝の上で眠り込んでいた。
「猫がお好きなんですか？」
男は私の方を見ずに、
「まあそうですね。動物は全般的に好きですけど」
と呟くように言った。
「私も。もしかしたら、猫より犬の方が好きかもしれません」
男に気を遣って曖昧な言い方をしたが、実は完全に犬派だった。すると、男は「それなら」と言いながら、ごそごそとポケットから携帯電話を取り出した。突然の地震に膝の猫が迷惑そうな顔をし、顔の位置を変えるとまた眠りこけた。
「これ」
と目の前に差し出された携帯電話の画像は、上目づかいで見上げるダックスフントだった。
「かわいいですね」
そう言うと、男は

「スーパーの前の柵に繋がれて、飼い主を待っている犬なんですよ。散歩の途中に突然置いてけぼりにされて、この表情が何とも言えないでしょう」
　と言いながら、携帯電話のボタンを押し、次の画像を目の前に出した。飼い主が入って行ったお店をまっすぐに見つめるコリーだった。
「全然カメラ目線じゃないですね」
「それがいいんですよ。何だか、この場所は自分がいる世界ではないと気付いてはいるけれど、相手を待ち続けるしかないという感じ」
　おかしな表現をするなと少し笑いがこみあげた。
「待ちぼうけの犬もなかなか良いでしょう？」
「はい。犬ってこんな表情するんですね」
「では、また面白い写真が撮れたら、メールで送りますよ。連絡先教えてくれますか？」
　そう言われて、思わずジーンズの後ろポケットに差し込んでいた携帯電話を引っこ抜いたが、画面を開けた時に、その自然なやり取りに騙されてあっさりと連絡先を教えるところだったと気がついた。
「赤外線で受け取りますから」
　しかし、もう今更断るのも不自然だし、この男はそんなに下心もなさそうだと思い直して、携帯電話を近付けたのだった。
　数日後、洋介が部屋に来た。この流れはもう自然になっていた。本人にとっては私との関係がまた元に戻ったと思っているのか。よく分からない。最近は、授業を受けた後ふらっと来たり、明日朝から授業だからと夜来たりもする。
「うちをホテル代わりに使わないでよ」
「ごめんごめん」
　洋介は頭をかきむしりながら、全然謝る気のない素振りでウインクした。
「彼女と連絡取ってるの？」
「うん、まあね」
　洋介の初恋相手であり、今の彼女であるぶりっこ女は洋介の実家がある山梨県にいる。東京から二時間程度あれば会いに行ける距離だが、それほどしょっちゅう行けないのだろう。だからまた私のところに来るようになったのだなと思った。
　何かを察したのか、洋介が近付いてきて、私をぎゅっと抱きしめた。
「景子のこと、なんかほっとけないっていうか。気になるんだよ」
　力を込めて体を抱く。押しつぶされそうになりながら、
「気になるって好きってこと？」
　と聞いた。
「そうだよ」
「好きってことは付き合いたいってこと？」
　洋介は体を離し、目を見つめてきた。
「景子とは付き合うという次元を超えてる」
「え？」
「結婚したいというか」
　するともう一度、私を抱き寄せた。
「何年かして、二人が不幸になってたら結婚しないか」
「不幸って」
　私が笑うと、
「ね、名案だろ。いつか結婚しよう」
　洋介は私の頬を両手で挟み、真剣な表情をした。
「……まあ、いいけど」
　いや、おかしいだろう。そう思ったけれど、私の頭の中の声が聞こえるはずもなく、洋介は私の唇を奪った。
　電気ヒーターの灯りは、暗闇の中にぽっかり空いた穴から噴き出るマグマのようだ。赤い光だけが近くを照らしだし、裸の体を同じ色に染めあげる。洋介の激しい動きが、私を揺らす。結婚という言葉を本気で信じたわけではない。でもこの人と一緒にいれば、いつか私も幸せになれるのかもしれない。将来のために保険をかけているようなものだ。けして流れ出さないマグマが、ずっと同じ場所を照らす。ぼんやり、でも強く。触れるとやけどしてしまうほど、熱い。でも光はぼんやりして暖かい。誰にも理解

されないだろう。でも保険をかけてでも恋愛していたいのだ。私は汗ばんだ洋介の背中にしがみつき、振動に身を任せていた。

「熱心に見てますね」

両手にソフトクリームを持って、私の横に立ったのは、猫カフェで出会った小太りの男だ。

「ありがとうございます、沢村さん」

一つ受け取って、上の方をぺろりと舐めた。沢村さんとは、猫カフェで出会った後すぐに「今度、動物園に行きましょう！」という能天気なメールをもらい、それから毎日メールをする仲になっていた。ほとんどが動物の話で、時折彼が待ちぼうけの犬の写真を送ってくれ、その写真を一人でいる時に何度も見返した。

猿山に気をとられていると、すぐコーンへと溶けたクリームが滴り落ちてしまう。沢村さんが大きな口をあけてぱくりと食べると、ソフトクリームの山は雪崩が起こったようにいびつに歪んだ。

「猿って鳴き声をあげて、相手の猿とコミュニケーションをとっているようですけど、お互いの言葉を分かってるんですかね？」

そう言うと、沢村さんは首をかしげた。

「鳴き声の具合も判断しているんでしょうけど、猿には独自のコミュニケーションがありますからね。群れで順位をつけあって行動したりとか。後ろに乗っかって順位を確かめあって、争いを回避するらしいです。まあ人間の方が辛いかもしれませんね。明確に順位なんて言わずに、水面下で順位をつけ合って生活している。他人と同一化したり区別化したり忙しいもんですよ」

コーンをばりばりと頬張りながら、眼鏡をずり上げた。

「私は、あの辺の猿になりたいです。そういう順位とか関係なさそう」

そう言って、山の上の方にいる親子の猿を指差した。ソフトクリームを食べている私たちをちらちらと眺めながら、母猿は子猿の毛づくろいをしていた。

「ニホンザルは、メスが支えているんですよ」

「どういう意味ですか？」

「メスは生まれた群れから離れないんです。オスが群れを移動していく。つまり、集団の核にいるのはメスなんです」

山を駆け回ったり、人間が投げる餌を拾いに山の下をうろうろしたりする猿がいる中で、そうした喧噪から離れるように、山の頂上近くで親子の猿は相変わらず毛づくろいを続けていた。

「だったら、私はニホンザルになれません」

沢村さんが驚いたように私の方を向いた。

「私は、どこかに留まってそこで集団を形成していくなんて、そんなことできそうにありません」

今にも溢れそうな涙で猿山が歪み、私は思わず両手で顔を覆った。沢村さんが慌てて、私の肩を抱いた。

「どうしたんですか？　何か嫌なことでもありましたか？」

ニホンザルのように、男性が私を通過して別の場所へいくことを思ったのだ。私の恋愛は、どこにも留まれない人間同士が移動の途中で偶然ぶつかっただけだ。愛だとか家族をつくるとか、そうしたことから分断された、単なる交わる行為だけがぽっかりと浮かんでしまったのだ。それと同時に、生まれてから死ぬまで同じ場所に留まり続け、耐え忍んで集団を形成していくメスたちの強さを思った。

「ごめんなさい」

そう言って、涙を拭きながら顔を上げた。両腕でしっかりと私を抱きしめた沢村さんの丸い顔が目の前にあり、この距離だとキスされるかもしれないと思った瞬間、沢村さんは私の肩を持ち、勢いよく自分の体から離した。

「大丈夫ですか？」

そう言う沢村さんの方が逆に心配になるぐらいに、顔を赤く染めて、汗がどっと噴き出ていた。

「汗すごいですね。暑いですか？」

「あ、すみません。汗臭かったですか？」

思わず、笑ってしまった。
「いや、そんなことないです」
沢村さんはジーンズのポケットに入れていた、よれよれの薄っぺらいハンカチを取り出すと、せっせとおでこや首筋をこすった。その様子が小動物のようで、何だか沢村さんらしいなと笑っていると、
「景子さんは、僕を見てよく笑いますね」
と怪訝な顔をした。
「ごめんなさい」
ばれてしまったと思うと余計におかしかった。
「景子さんが笑ってくれるならうれしいです」
もう、使い古されたような表現しかできないんだから。そう思ったけれど、温かく見守ってくれる沢村さんに私は安心感を抱いたのだった。
駅の改札口まで来ると、沢村さんはリュックから小さな紙袋を出した。
「何ですか？」
受け取って、袋を開けるとフェルトで作られた犬のキーホルダーだった。
「僕は今まで女の人とこうやって出かけることがなくて、どうしたら喜んでもらえるか全然分からなかったんですけど、今日の記念になるかなと思って」
私が驚いていると、
「いい歳して、こんなことぐらいしかできなくてすみません」
「ありがとうございます。うれしいです」
「また会ってもらえますか？」
「もちろんです」
ホームで沢村さんと別れた後、電車の中でもらったキーホルダーを取り出して眺めた。少し握ると、柔らかいようで芯のある弾力を感じる素材だ。きゅっきゅっと手のひらでやさしく握った。
あんなに純粋な男の人もいるんだ。
私は彼の考えている普通の女の人と同じだろうか。私はもしかすると彼をたぶらかしているのかもしれない。
膝の上に抱えていたバッグの中で携帯電話がぶるぶると振動した。それがちょうど腹部のあたりに伝わってくる。赤ちゃんがお腹にいたらこんな感じなのかな、とふと思った。バッグごとぎゅっと抱き、目をつぶった。沢村さんからのメールだろうと思った。沢村さんが私のお腹を内側から揺らしているのだ。機械だと分かってはいるけれど、伝わる振動は温かった。
アパートに着いた時、洋介がドアの前で座っていた。私に気づくと、いつものように片手をあげた。
「連絡してくれればよかったのに」
そう言うと、
「突然来た方がありがたみが増すかなと思って」
と、缶コーヒーを一つ差し出した。
「ありがとう」
自然と部屋に入って来ると、後ろから抱き締められた。
「まだ荷物も置いてないよ」
「だってもう待ちくたびれた」
「そっちが勝手に待ってたんじゃん」
洋介は体を離すと、テレビをつけて横になった。
「景子は結局、就職活動どうしたの？」
「やってない」
「周りがみんなやってると焦らない？」
「洋介こそ、どうするの？」
洋介は自慢げに言った。
「俺は全然単位とれてないから、とりあえず四年生をもう一回やることは決定している」
「何それ」
もらった缶コーヒーのプルタブをひねる。相変わらずだな、と思った。
「だから、今年はゆっくり考えるわ」
「ゆっくりって言っても、秋ぐらいからもう次の就職活動が始まるでしょ」
洋介はまた横になり、のそのそと這いつくばって動くと、私の膝に頭を乗せてきた。
「景子がどうするか見届けないと」
「何言ってんの。山梨の方の会社とか受けないの？　彼女もいるんだし」

洋介はふうとため息で返事をした。
「景子は卒論書いてる？」
「書いてるっていうか、撮ってる」
「撮ってる？」
「先生が論文でなくていいって言ったの。映像でもいいって」
すると、洋介は突然体を起こした。
「景子がまた映像撮ってるなんて。見せてよ」
「いやでも、まだ編集も中途半端だし」
「それでいいから。見たい」
映像が始まる前に、「えっ、ドキュメンタリー？」と言っただけで、終始無言で右手の親指の爪を少し噛みながら、洋介はじっと食い入るように画面を見つめていた。素材の状態なので、最後ぶつっと映像が終わると、洋介はまた長く息を吐き出した。
「どうかな？」
私がそう言うと、
「定点撮影だけだと、結構飽きるな。しかも大半が会話っていうか、主にインタビューだろ？　ハンディカメラで一つ動きのある映像とかも入れた方がいいんじゃないの」
「まあそうだけど」
「俺が撮影しようか？」
真面目にそう言ったことが声質から分かったけれど、
「いや、いい」
と思わず拒絶してしまった。「そっか、そっか」とおちゃらけたように洋介は呟いた。結構強い口調で否定してしまったことに、自分でも驚いていた。
「映像を撮ってみて何が分かったの？」
「まだはっきりとした結論は見えてないんだけど、私がやりたかったことは会話そのものではなくて、コミュニケーションのような気がしてるの」
「会話もコミュニケーションだろ？」
「そうだけど、こうやって映像を撮影することで会話そのものを分析する手法があるのよ。放った言葉の間合いだとか、言い回しだとか。相手の反応で変化していく言葉を追いかけるの。でもそういう手法ではなくて、映像そのものっていうか……」
「何となく分かる」
洋介は唇を噛み締めると、ぼりぼりと頭を掻いた。
「つまり、景子は映像で分析してるってことだろ。映像を撮ることとそれを相手に見せること、それ自体が、景子にとってのコミュニケーションなんだ。単なる記録映像という意味のドキュメンタリーではなくて、相手と会話するための道具っていうか」
「そうかもしれない」
洋介のこういうところが好きだった。私の言いたいことが他の誰にも伝わらなくても、いつも洋介だけは感じ取ってくれた。どこかで共通している感覚があって、それを表に出してくれるのは洋介だった。
「この映像を最後まで編集して、景子なりにまとめられたら、それを関わった人に見せて行くべきだよ。そうしてフィードバックしてこそ、映像を通したコミュニケーションの分析になるんじゃないか」
「そうだね。ありがとう、洋介」
大きな口を開けて、にかっと笑うと洋介は言った。
「俺も負けてらんねぇな。景子がまた映像を撮り始めたんなら、俺も新しい作品つくりたくなってきた」
「何よそれ、ライバル意識？　昔はそんなことなかったのに」
「だって前は俺の方が映画撮るのうまかったもん。でも……」
「でも？」
「でも、今の景子は、俺よりもっと語ることがあるって感じだよ」
「そうかな」
「映像を通して、語りたいことがいっぱいあるって感じ。だから、俺も負けてられない」
洋介はさっと靴を履いて出て行った。
よく晴れた日曜日。甲高い声をあげて子どもたちが走り回る公園を沢村さんと並んで歩いていた。薄い色のチェックのシャツとジーパンを履いた沢村さんは、社会人な

のに浪人生のように見える。生温かい風がびゅうと吹きぬけ、青々とした木々の葉を揺らしていった。
　都会の真ん中に、あえて作られたようなだだっ広い公園で、奥へ奥へと進んで行くと芝生地帯が現れる。家族連れやカップルなどが、駆け回ったり寝転んだり、思い思いに過ごしていた。こんなに多くの人が来るのかというほどに公園に人が密集している。私たちは、端に設置された、奇妙な姿勢のブロンズの女性像のところまで歩いた。
　沢村さんはリュックをおろすと、中から立派なカメラを取り出して、私を一枚撮影した。
「撮っていいと許可していませんよ」
　と言うと、沢村さんは「ごめんなさい」と眉を寄せて落ち込んだ表情をした。
「冗談です」
　私が笑うと、沢村さんはすかさずまた一枚シャッターを切った。
「私もビデオカメラを持ってきたんです。沢村さんに見てほしい映像があって」
　そう言って、鞄からカメラを取り出し、ブロンズ像の下に腰掛けた。
　私は、卒業論文の撮影のために訪れた商店街の映像を再生した。学生が喜びそうな大盛りばかりが並ぶメニュー表。古ぼけたブティックの前の時代遅れの服を着たマネキン。少しさびれた商店街を映し出しながら進んで行く。
「ここはどこですか？」
　沢村さんは食い入るように映像を見つめていた。
「私の父が昔住んでいた街です。父のルーツをめぐっているんです」
　映像が進み、商店街の脇の路地に入ると、突然ものすごく大きなマンションが現れた。最上階の階数が少しずつ違うのだろう。扇を開いたような形をしている。まるで両手を開いて私を迎え入れるように待ち受けているという印象だった。
「すごい。巨大なロボットみたいですね」
　近付くと、太陽を覆い隠してしまうほどの大きさだと分かる。見上げてもその最上階が何十階なのか分からないほど無数の窓が連なる。その建物は、何か有機的な生物のようだ。細胞の一つひとつが家族でできている。建物の大きさやその形状の異様さよりも、そのことが余計に恐ろしく感じた。巨大な生き物としか思えなかった。
　マンションが建設される前は、父が学生時代に住んでいたアパートがあった場所だ。もう取り壊されて、巨大な生物に変身し、見る影もなくなっている。
　その建物を撮影しているとき、なぜか沢村さんに会いたくなった。この建物の奇妙さと心のどこかに感じる恐ろしさ、そしてここに住む家族の滑稽さ。全てを包みこむこのマンションを沢村さんに見せたい。沢村さんは何て言うだろう。そう思いながら、夢中になってカメラを回した。
　沢村さんも同じ気持ちなのかもしれない。街で出会った犬や猫の写真を時々メールで送ってくれたり、会った時に見せてくれたりする。もしかするとそれを撮影する瞬間に頭に思い浮かぶのは私なのかもしれない。
　沢村さんに、私の過去の恋愛のことをどう伝えるかではなくて、今、私が生きているこの一瞬を共有したいということ。私が見たこの景色を一緒に感じてほしいということ。その相手が沢村さんだということなんだ。
「他の建物がこれほど大きくないから、突然ぽっかりと空に浮かんだ城みたいな気がするでしょう」
　そう言うと、突然、
「こういうところに、景子さんと住めるといいなあ」
　と呟いた。
「沢村さん、マンションに住みたいんですか？」
　すると慌てて、頭をかきながら、
「いや、景子さんと住めれば、どこでも」
　と、しどろもどろになりながら言った。
「この生き物の細胞になれるか、分かりませんけど」
「細胞の一つになれるように、僕が取り込

みますよ。この中に」
「沢村さん」
私が呼びかけると、沢村さんは覗き込んでいた顔を慌てて離して立ち上がった。
「はい」
私も立ち、向かい合わせになって、ビデオカメラを持っていない方の手で沢村さんの手をそっと握った。
「この建物を見つけた時、沢村さんに一番に話したいって思ったんです。沢村さんにこの建物を見せたいって感じたんです」
「はい」
「きっと、私は沢村さんが思っているような人じゃないと思います。沢村さんもそうかもしれない。好きなことや興味があることや、話す言葉や表現や、全てが違うかもしれません」
沢村さんが逃げないように、私は握っていた手に力を込めた。
「それでも、今、私が感じたことを共有したいって思うのは沢村さんなんだってことに気づいたんです。それでもいいですか?」
沢村さんの額には汗が噴き出していて、前髪がぺとりと貼りついていた。丸い顔に乗っかった眼鏡のレンズは今にも曇りそうだ。沢村さんは、どう見ても私が好きになるタイプの男性ではない。きっとミオに写真を見せたら笑われるかもしれない。沢村さんは私の手を握り返した。
「景子さんは、焦って全てを言葉で語る必要はないんです。言葉でなくても、こうして映像でも、写真でも。重要なのは、共有したいという思いなんですから」
沢村さんの話す言葉は、いつも陳腐で物足りない。きっと洋介だったら、痒いところに手が届くような物の言い方をするはずだと思ってしまう。
でも、いつだって、何をしていたって、思い出すのは沢村さんだ。
沢村さんは私の希望だ。
ふかふかのタオル生地のハンカチを鞄から取り出し、沢村さんの顔を拭いた。
「沢村さんに話したいこと、いっぱいあります。だから、これからもずっと私と一緒にいてください」
沢村さんは熟れたトマトのように、顔を真っ赤にした。その様子を見て、私はまた笑ってしまった。

（了）

惨めだったのか。他人も、自分も不幸せなやつだと思っていたのか。そうかも知れない。しかし、子供の頃から、ポケットに星屑をつめていた。いつもこころ細い時にはポケットのなかの闇をまさぐった。明るい絶望というものだってあるのさ。真暗なポケットに宇宙があり、希望の星はそのうちに太陽系に飛びだす。うつむいて歩きながら、そう考えていた。あの頃、辛さと屈辱を味わったはずなのに、いまは懐かしい。たぶん人にとって大切なことはポケットの中の星屑なのだ。

浅井慎平「ポケットに星屑を」

Philosophy of Stardustbooks

——文化系の趣味を持つ人々をつなぎたい。

「自分と似た趣味を持つ人が世の中に存在しているんだろうか？」
そう思ったとき、手にとった雑誌が教えてくれた。
“あなたは、一人ではない” 自己表現して、セカイとつながる。

スポーツが好き。アウトドアが好き。決して嫌いなわけではないけど、たまにみんなとノリが合わないときがある。

小説が好き。映画が好き。漫画が好き。でも、オタクと呼ばれる人たちとは少し違う気がする。

ひとりで考え込み、ノートに書きつけ、誰かと出会いたいと試行錯誤を繰り返す。

そんな人たちがつながり、自己表現する場をつくります。

星屑書房
STARDUST BOOKS

星屑書房は文化・芸術活動を推進する団体です。

stardustbooks@live.jp http://stardustbooks/soragoto.net/

編集後記

一路真実

今回は余裕がなくて、長編小説としてストックしていた作品を恋愛部分だけ抜粋して、無理に短編小説に仕上げました。「そう言われると長編も読みたい」と思ってもらえる作品になっていることを願います。

鳴山豆子

正直者だけが住む国に行きたいと思うことがあるんですが、冷静に考えると
そんな国つらいだけですかね。嘘つきだけが住む国に行ったらどうでしょう。
今年は短歌を沢山作りたいです。

詠人不知

知らず知らず読んできた細く長いこの未知

馬場貴生

今回からパパタカオ改め、馬場貴生とします。皆様、どうかよろしくお願いします。
今号では怪人が主人公の小説を書かせていただきました。楽しんでいただければ幸いです。 P.S ブログをやっております。
「mo! もあざん」http://takart.jp/ お暇な方は、僕のブログもご覧ください。

天沼太郎

最近、SACDを買うことが増えました。音質はもちろん、長時間(CD４枚分!)収録できるので、CD交換の手間が省けて便利です。例によってご意見ご要望は
doguramagura71@gmail.comへどうぞ。

o's job

デッサンをもとに作品を創ります。人体の具象になります。

しなおかななし

死者のことを想うのは、死んだ人を慈しむためだけではありません。 自分の中に居続けるその人の思い出を、決して忘れないためです。

チコ・オーノドックス

「とびだせどうぶつの森」をやっていて、もう大概飽きてしまっているのですが、村のみんなをみすてるのがしのびないためやめることができません。

星屑書房について ＆メンバー募集！！

星屑書房は好き勝手に表現活動をしていく文化系サークルです。
現在は、フリーペーパーの制作・配布が中心ですが、今後は幅広く、文化系活動をしていく予定です。
本を読むことが好き。本を自分で作ってみたい。
映画を観ることが好き。　映画を撮りたい。　・・・などなど、文化系趣味を持つ人々をつなぎます。
社会人が中心ですが、誰でも入会ＯＫ！「こんな活動してみたい！」という提案募集中☆
少しでも興味を持たれた方はこちらにご連絡ください！　stardustbooks@live.jp
お待ちしています！

おまけ短歌

踊ろうよ嵐みたいにあの人がやさしい人で君は悲しい

まちがってとても汚くなっていくここにいるのがいるということ

海岸に整列をして戻るもののためだけいつも泣いてる夕日

真実を話しましたか向かい合うグラスワインにこぼれる灯り

世界中の洗濯物をひとつずつ畳んだ罪を君は認めて

嘘つきは同じよみんな微笑んで怖れたものもなつかしい今日

ランドリーにおばけと並ぶありふれた思い出たちがあかるい真昼

誰がつけた傷？輝いて滲んでる信じ切れずにここに来たこと

やわらかい笑顔で君が差し出した約束なんて願い下げです

閉じてない穴を覗けばゆっくりとまばたきをする猿と目が合う

創星　第7号

2013年3月31日　初版

発行元　星屑書房

http://stardustbooks.soragoto.net/

©2012 STARDUST BOOKS, Printed in Japan.
本書を無許可で複写・複製することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。